

首巻き春貞

貝 江戸暦 (一)

蘭学事始異説

表紙デザイン junichi Matsuda

松平春貞

ませた子。 尾張柳生新陰流免許皆伝。 通称首巻き春さん。 尾張第六代藩主德川継友、 本名は松平春貞。 江戸向島に屋敷がある 第七代藩主徳川宗春とは腹違 尾張藩三代藩 主徳川 綱 誠 が 市 17 井 の兄弟。 0 女に生

蘭

春貞と亡き妻幸江の娘理子が産んだ一子。 春貞の孫でただ一人の血縁

佐吉

亡き弥三郎 の甥にあたる優秀な御庭番

米道格左衛門

尾張御連枝松平家時代の春貞の友。 春江館館長。 夏穂の夫

米道夏穂

なった。 太子堂長兵衛 春江館師範 の一人娘で剣の虫。 春貞夫婦の養女となり米道格左衛門と夫婦に

静香

後、 公することに。亡き弥三郎に女忍びの技を伝授されたが春貞の妻幸江が亡き 父の無念を知らしめようと武家屋敷の刀を盗む女賊だったが、 屋敷の奥向きを取り仕切る 春貞の屋敷で奉

・留吉

春貞らに命を助けられたことから屋敷の下僕として働くことになり奈美と

祝言を挙げた。棒術の名手

・田宮秋子

理人富四郎亡き後、 亡き田宮助左衛門の一人娘。 料理人の責任者となる その後堀田万之助と結ばれるが万之助は死去。 料

・田宮(石川)奈美

屋敷で田宮助左衛門の二人目の娘として生きることを決意。留吉と所帯を持つ 木更津の代官、石川賢之介の弟仙之助の娘。 父の敵を討つことが出来、春貞 \widehat{O}

・ お 文

義足をつけている。 もともとは向島診療所の患者で左足を切断する手術を受け、井之上新界設計 夫が亡くなった後、 縁があり診療所の手伝いとして雇われ ... の

る。 診療 所は勿論 屋敷の雑用を一手に取り仕切 る働き者

・ お 輝

お文の一人娘で母を助け屋敷の雑用をこなす

·井之上新界

小田原 門を叩き向島診療所で働くことになった。 の廻船問屋の次男。 長崎に遊学し阿蘭陀医学を学んだ帰りに小川笙船 またおよしを妻に娶る。 現在は診療

所二代目肝煎

・およし

な医者として活躍 建てられた診療所で小川笙船の助手となり井之上新界と結ばれる。 留吉の妹だが幼少とき女衒に売られ吉原の遊女に。春貞に身請けされ屋敷内に その後おん

·井之上新一郎

井之上新界とおよしの一子。 十七歳で長崎へ遊学し吉雄耕牛に蘭学と阿蘭 陀医

学を学ぶ

· 田宮道之助

堀田万之助と秋子の一子。 祖父田宮助左衛門の血 か、 経済に明るく屋敷の経

護

の責任者である小姓組番

頭

に抜擢。

後に側用人、

老中と出世し田沼時代と呼

徳川家重

0

西丸小姓として抜擢され、

家

重が第九代将軍となると将軍の身辺警

理・財務全般を取り仕切る

·吉太郎

留吉と奈美の一子。 長崎留学から戻った後は新一郎と一 緒に診療所を手伝う

· 伊丹深雪

亡き南町奉行所、 定町廻り同心で春貞の親友、 伊丹鉄太郎の女房

·伊丹歌代

伊丹鉄太郎と深雪の娘

德川家治

・田沼意次・田沼意次

十代征夷大将軍。家重の世嗣

ばれる権勢を握るに至る

・杉田玄白

父は小浜藩医 金が足りず藩 の杉 の家老に必要性を訴えて購入。 田 甫 福。 中 ΙİĮ 淳 庵からター 前野良沢、 ヘル・アナトミアを勧 中川淳庵らと和訳をは められ るも

じめ ·安永三年(一七七四年) に 「解体新書」 として刊行する

·前野良沢

学し吉雄耕牛に蘭学を学ぶ。 明和六年(一七六九年)藩主の参勤交代について中津に下向した際、 ターヘル・アナトミア翻訳 の盟主 長崎へ留

·平賀源内

者、 として知られる。そして安永五年(一七七六年)には長崎で手に入れたエ 本来は本草学者だが、江戸時代のレオナルド・ダ・ビンチとも称され、 テル(静電気発生機)の復元に成功する。 蘭学者、 医者、殖産事業家、 戯作者、 浄瑠璃作者、 俳人、蘭画家、 地質学 発明家

·桂川甫周

代々将軍家に仕えた幕府奥医師の家系で頭脳明晰な蘭学者。 初期から 「解体新

書」翻訳を手伝う

・中川淳庵

沢 狭国 ・杉田玄白とともにターヘル・アナトミアを最初期から翻訳 小浜藩に勤めた江戸の蘭方医であり、 杉田玄白の後輩にあたる。 前野良

た

小田野武助(直武)

秋 ア」などから大量の図版を写し取り「解体新書」の図版を画く H 藩 平賀源内に蘭画の教えを請い源内の勧めで「ターヘル ・アナトミ

·吉雄耕牛

寛延元年(一七四八年)に二十五歳で大通詞となった。 を伝授され、 弟)とは親交を結び、当時日本で流行していた梅毒の治療法として水銀水療法 長崎に出生。 の医師やオランダ語訳の外科書から外科医術を学ぶ。 (G.R.Bauer) やツンベリー (C.P.Thunberg[°] 幼 実際の診療に応用。 い頃からオランダ語を学び、元文二年十 オランダ語、 医術 スウェーデン人でリンネ の他に天文学、 特にバウエ ·四歳 通詞のかたわら商館付 のとき稽古通詞 ル 地理学、 -の高

草学なども修め、

また蘭学を志す者にそれを教授した

により跡を継ぐ。 尾張藩第九代藩主。八代藩主宗勝の次男。 藩校明倫堂を創設。 新田開発、文教政策など藩政改革に努め 宝暦十一年(一七六一年)父の死去

· 金 次

小石川金杉水道町を縄張りにする地元五代目の十手持ち。女房はお佳

·岩次郎

須田町で十手持ちと金貸しの二足のわらじを履く岡っ引きだったが隠居し養子

の三郎に十手を託す

相模屋清右衛門 (二代目)

日本橋両替商相模屋の主人。

富吉

仏壇仏具の大店太子堂の大番頭だったが先代の主人長兵衛に御店を任された

第 第 第 第	長崎から江戸へ	目次	一 一 一 一 四 十 一 頁 頁 頁 頁 頁
あ と が き			八四

った。

序の章 長崎から江戸へ

明 様々な秋の草花が咲き乱れていた。 和 七年 (一七七〇年) 秋、 長崎にある阿蘭陀通詞、 吉雄耕牛の屋敷の庭にはよしおこうぎゅう

その庭を見通せる一室で耕牛は前野良沢、 平賀源内そして井之上新一 郎を同 席 3

せていた。

このとき前野良沢は四十六歳、 三人の年齢は大きく違っていたが、 平賀源内が四十二歳、そして新一郎は二十一歳だ 共に 耕牛に蘭学を学ぶ弟子たちであった。

新一 師およし 郎は 江 の一子だったが、 戸 向 島 の松平春貞の屋敷内 父親に感化され、父と旧知の仲だという吉雄耕牛の門 にある向島診療 所 0 医 師 井之上新界と女医

を叩 いてから早くも二年経っており、 年明け早々には江戸へ戻ることになってい

際、 四年)には青木昆陽に蘭学を学び、昨年藩主の参勤交代について中津に下向 一方、 藩主の了解を得て長崎へ留学し耕牛の門を叩いた。 前野良沢は豊前国中津藩の藩医だったが、蘭学に目覚め明和元年(一七六

その青木昆陽も吉雄耕牛の弟子であった。

平賀源内はこの年、宝暦二年(一七五二年)以来二度目の長崎に来ることが出来

墨付きを得ただけでなく餞別として二百両を受け取った。 現するためにはまだまだ資金が足らず、急遽浄瑠璃台本を三本完成させ旅費の一 た。さらに親しく接している老中田沼意次から「阿蘭陀翻訳御用」という旅 しかし長崎で思い を実 のお

「前野先生は青木昆陽先生をご存じでしたか」

部としていた。

新一郎がどこか懐かしそうに言った。

いったお方でしたな」 「はい。ご承知 のように、昨年はやり風邪で亡くなられましたが全身これ情熱と

良沢が庭から差し込む心地よい日射しに目を細めながら呟い

「失礼ながら井之上さんはお若いですが、藷先生をご存じでしたか」

良沢が問うと、

聞きましてございます」 から青木先生が初めて屋敷の畑に生る甘藷を見て驚喜していたという話しをよく 「わたしは残念ながらお目にかかったことはございませんが、当屋敷 の主人たち

「ほう。それは初耳…」

小女が運んで来た茶に手を伸ばしながら吉雄耕牛は、

と申したらよいか、主人の春貞さまは不思議な魅力あるお方でございました」 「それがしも何度か向島のお屋敷に老中田沼さまと共にお伺いしましたが、なん

と懐かしそうに言った。

「松平春貞さまはご存命でございますのか」

良沢が新一郎に問うと、

も近寄れないというお強いお方ですが普段は磊落でお優しいお方です」 「はい。 お元気でございます。齢七十三になります。 剣を手にいたしますと鬼神

新一郎が言うと源内は、

「春貞というお人はあの竜吐水を考えたというお方かな」

それまで庭の草花に目をやっていた源内が口を開 いた。

源内は本草学者でもあったので、長崎 [、]の地の草花に関しても知識を得たいと考え

ていたのだ。

「はい。主人は十歳のとき一年間この長崎の縁者に預けられていたとき、 見聞き

したことから思いついたと申しておりました。

ちなみに命名はあの大岡忠相さまが町奉行時代のことだそうです」

新一郎は律儀に答えた。

「ふうん。面白そうな爺さんだな」

源内が鼻で笑うように呟くと耕牛は、

「春貞どのは吉宗さま以来、今日まで公方様直々に殺生与奪の命を受けているた

だ一人のお方。

間違ってもご本人の前でそんな物言いは慎むことです。でないと気がついたら首

が胴体から離れてますぞ」

と釘を刺した。

「先生。お言葉ですが、首が胴体から離れたら気がつくことはできんでしょう」

源内が突っ込むと一同に笑いが起こった。

「ともあれ、 田沼様も一目おかれている御仁。 上様や大御所さま、 尾張藩主さま

もお屋敷に伺われるとのこと。

やはり不思議なお方でございますな」

と耕牛がいうと良沢は、

「井之上さん。江戸に戻った際には是非伺わせてくだされ」

と願った。

「そうか。井之上さんは年明けに江戸へ戻られるのだな」

源内が事も無げにいうと、

「はい。もともと二年という約束で春貞さまから費用を出していただきましたの

新一郎が答えると、

でこれ以上我が儘は申せません」

「へえつ。いい爺さんではない新一島が答うとう

か。

俺も江戸に戻ったら紹介してもらおうかな。

何しろ俺 の身内はとんとあてにならねえでな、 餞別も出してはくれねえ。

それはともかく、ここの所阿蘭陀館に出入りしていたが面白えものを見つけたん

たし

源内が目を輝かした。

「ほう、源内さんが面白いといったものがまだ世の中にあるんですか」

源内の博識の高さを知っている新一郎が尋ねると、

「おう。 エレキテルというんだ。壊れているようだが江戸に持って帰ろうと思っ

てな…」

源内が嬉しそうに答えた。

平賀源内の名はこの頃、徐々に知られるようになっていた。特に宝暦十二年(一 から一三○○余りもの物産が集まっただけでなく、後に重要だとした三六○種に 七六二年)というから八年前 の四月に自ら会主となって行った東都薬品会は全国

ついて記した全六巻の「物類品隲」を出版したことで、本草学者としての名声は

より高まっていた。

「エレキテルですか…。それは何に使うんですかな」

良沢も思わず問いただすと、

首巻き春貞15_決定版_新表紙.hagorom

どうやら阿蘭陀あたりでは治療の道具として使うらしいがな。 平賀源内が笑顔を見せた。 ともあれ、俺はあと二年ほどこの長崎でやらねばならぬことがある。 また江戸で会おうぜ…と」 「これまで見たこたあねえ代物なので正直俺にもわからん。

前野良沢と平賀源内そして井之上新一郎が吉雄耕牛に教えを請うていた頃、 みがなされていた。 でも歴史の表舞台には登場しないものの、その後の医学に大きく貢献するある試

そのころ、春貞の屋敷奥にある向島診療所は相変わらず地域の者たちにとって無 天寿を全うした後も井之上新界が二代目肝煎となり、 くてはならない施設だったが、肝煎の小川笙船が宝暦十年六月に享年八十九歳で 妻のおよしと共に地域の

人々の治療や健康啓蒙のため日々努力を続けていた。

なり、 ていた。 その新界が若 時に杉田玄白(三十七歳)や中川淳庵(三十一歳)らが訪れるようになっ 心頃、 長崎で吉雄耕牛に教えを請うたことが次第に知られるように

茶を楽しんでいたが、そこには静香の手により桔梗の花が一輪掛けられ、 その日、 診療所を閉じた後、 新界の勧めで杉田玄白や中川淳庵は茶室で一 服 一服の の薄

絵となっていた。

話題は当然といおうか、 蘭方に関することに花が咲いたが、 すでに五十四歳にな

っていた新界は皆に一目置かれる存在だった。

阿蘭 臓六腑の実体とあまりに違うとのことでした」 「しかしご同輩。 院の医師たちから話しを聞いたという仲間によれば本道で信じられてい 問題は我々はまだ腑分けさえ経験 しておらんことです。 た五

杉田玄白が言うと中川淳庵も、

「さよう。だとすれば我々はただただ医者面をこのまま続けて良いものか、 気が

と呟いた。

重くなりますな」

解き明かし 確 かに。 た者はおりませなんだ。いや、 私が若 ζ **)** 頃 長崎にいたときも腑分けをして実際に人の身体の 腑分け自体はときにあるようですがそ 仕組 み を

れがまったく活かされておりません。

何だか不甲斐ない話しですな…」

そのときお文が躙り口から、 と新界も茶器を手にして口にした。

主人の願いでございます。是非お移りください」 「失礼いたしますが先生方。 客間に膳 の支度が出来たのでご一緒してくだされと

と声をかけた。

「おお、もうこんな時間でしたか。

厚かましいですがまたまた馳走になりましょうか」

腹が減ったのか玄白が率先して茶室を後にした。

客間に入ると春貞の隣に見知らぬ武家がにこにこしながら座していた。 「さあさあ皆さん、こちらにお座り下され」

れた場所に三人が座った。 春貞の言葉で頭を下げながらすでに屋敷の者達が座っている背後を通り、 勧めら

杉田玄白と中川 かった。 |淳庵はすでに何度も屋敷に来ていたがその武士とはまだ面識 が 無

う。 春貞の紹介によれば御様御用をあずかる山田浅右衛門吉寛(三十四歳)だとい

です」 本日は跡目相続の手続きが済みましたことのご報告で立ち寄らせていただいたの 吉寛は、 いただき、それがしも子供の頃より何度か父に連れられて伺っておりました。 「山田家は祖父にあたる初代浅右衛門吉時の時代から春貞さまとは親しくさせて 先代吉継がこの八月に死去したために跡目を継いだのだった。

吉寛はそう自己紹介をした。

「さようでございましたか。それはお目出度うございます。

我らは蘭方を学んでおります医者ですが、こちらの診療所の肝煎、 息子さんの新一郎さんは共に長崎で学ばれており、 という御仁もそろそろ戻ってくる頃だと思います。 我らの仲間でもある前野良沢 井之上先生と

で、時折春貞さまのお屋敷の一室をお借りして蘭学談義をさせていただいておる

のです」

杉田玄白は綺麗に剃った頭を撫でながら言った。

「なるほど、お手前たちは長崎組というわけですな」

山田浅右衛門吉寛が笑みで返すと、

「いや、残念ながら私と杉田さんはまだ長崎に行けませんが、 その長崎組という

のは宜しい名でございますな」

中川淳庵が嬉しそうに答えた。

その後夕餉が終わり、茶を飲みながらの雑談になったが、

「今日はどのようなお話しがありましたのか…」

春貞が玄白の方へ向いて問うた。

「はい。いつもの愚痴となりますが、 なんとか蘭方をめざす医師として腑分けを

体験したいというまたその話になりまして…」

と言うと、

「お医師が腑分けと申される理由は人の体内の事を詳しく知りたいということで

ございますかな」

浅右衛門吉寛がこれまた茶器を持ったまま問うた。

ませぬが、 しかし医者でもこればかりは禁止されておること。思うようにはま 人の身体の仕組みを知らずして治療を口にするのは本末転倒だという ŋ

のが我らの心情でございましてな…」

玄白は唾を飛ばす勢いでまくし立てた。

「なるほど。春貞さまのいらっしゃる場ですから虚言は申しませぬが、我が屋敷

なら死体はなんとでもなります。

我らは公儀より刑死した死体に刃を入れることを許されております。

それにご存じだと思いますが、山田丸とか人胆丸と名付けた丸薬は我が山田家の 秘薬にございますが、そうした臓器から製造しているものです」

吉寛が言うと、

「はい。存じております」

淳庵は頷きながら応じた。

「ここだけの話しとさせていただきますが、もし各々方が秘密をお守りできるな

ら、我が家の蔵で死体を分ける際、立ち会われることは可能ですぞ。

無論お手を出されるのは禁止でございます。ただし、ああだこうだとご指示やご

質問をされる程度なら問題ありませぬ

したがって手慣れている者が作業する場にお二人が立ち会われるだけなら何

ともございませんでしょう」

吉寛が言うと井之上新界は思わず春貞に身体を向け、

「は、春貞さま・・・」

と哀願するように声を上げた。

茶器を置いた春貞は、

「そうよなあ。亡くなった笙船先生もできることなら腑分けを体験したかったと

申されておった。

お主たちが浅右衛門どのらのお役目に支障をきたさないと約束できるなら俺から

と静かに呟いた。

も吉寛どのに願ってみようかのう」

方がよいという。 明後日が師走という寒い日、 中川淳庵 と共に山田浅右衛門の屋敷に向かった。やはり死体を扱うには寒い日の 井之上新界は珍しく診療所を休み、 杉田玄白お よび

屋敷に迎えられた三人は早速吉寛に案内され目的の蔵に足を向けた。

広 し新界らは医師であり死体には縁があるからそんなに苦にはならなかったものの い屋敷内 にはいくつか蔵があり、 確かに異臭が漂っているが吉寛 は 慣れてい

次第にその異臭が強くなってきた。

棟の蔵の前に立つと開き戸が開いており、 年配の男が二人して吉寛に頭を下げ

た

「イゾウ、トシ。はじめてくれ。

こちらが今日立ち会う客人だ。問われたことは分かる範囲で返答するように頼む

ぞし

と命じた後、

「時間は半時ほどです。短いか も知れませぬがお許しを。

この二人は腑分けは手慣れておりますのでご指示やご質問があればご遠慮なくお

申し付け願いたい。

それがしは部屋で待っておりますので…」

と吉寛は一礼して踵を回した。

「では旦那方、こちらへ」

イゾウと呼ばれた男が先導し薄暗い蔵の中央付近に立つとトシが、

「これをおつかいなされ」

と真新しい手拭いを三本渡してくれた。

新界らは無言で頭を下げ、手拭いを口と鼻が隠れるように巻くと異臭が多少和ら

いだ。

目が暗さに慣れてくると周りに置かれた蝋燭の明かりで置かれている屍が見える

「女か…」

ようになってきた。

中川淳庵が言うと、

「へえ。女と武士そして坊主は試し斬りに使われませんのでな」

と刃物を持ったイゾウがそう言いながら屍の前にかがみ込んだ。

「始めてよろしいかな」

と蝋燭台を近づけてトシがいうと新界ら三人が「うむ」と呻るように答えた。

「まずは腹を裂きますで…よくご覧になっててくだせえまし。 わしらの腑分けはお上のそれとは目的が違いますでな。些かやり方が違う ただしお医師

と思います。その点は承知してくだされ」

そう呟いたイゾウは淡々と眼前の屍を処理していく。

「それが胃の腑ですか」

杉田玄白が小さく声を上げると男は、

「わしらは臓器の名などほとんど知る由もねえですが、 胃の腑と心の臓は分かり

やすいな」

と答えた。

薄暗い内、 目に入る物はすべて記憶しようと三人は睨むように屍に顔を近づけて

く く :。

また井之上新界は要領よく腑分けの様子を筆で奉書に描いていた。

あっという間に半時が過ぎたものの三人は両足が地に縫い付けられたように重 「片付けますで外に出てくだせえ」と言われてもすぐには歩き出せなかった

ほど疲労感で一杯だった。

手足を洗い、顔を洗って先ほどの客間に座すとすぐに吉寛が入ってきた。

「いかがでございましたかな」

の問いに新界が、

「は、 初めての事で頭が混乱しておりますが、 お陰様にて見るべきものは拝見さ

せていただいたと思っております。

首巻き春貞15_決定版_新表紙.hagorom

しかし…」

と言葉を止めた。

「しかし…」

「これまで見知っていた五臓六腑の姿とはまるで違う…」

と杉田玄白が深い息を吐くと、

「さようですな。あとは井之上さんが書き写された絵図と阿蘭陀の書物に載って

そんな都合の良い書物があればの話しですがな」

いるという図例などとをきちんと比較したいものですな。

中川淳庵も興奮冷めやらぬ顔で井之上新界と頷きあった。

新界は、

ぬ。これからどうするか、前野良沢さんが長崎から戻ったらまた皆で相談しよう 「ただし杉田さん、中川さん。我らがこちらで腑分けを見学したことは明言でき

と言うと、

「長崎組は忙しくなりそうですな」

杉田玄白はやっと破顔した。

年が 風呂敷包みを抱えながら杉田玄白の屋敷に駆け込んできた。 明け、 明 和八年(一七七一年)正月早々のことだ。 中川 淳庵が血 相をかえ、

「杉田さん。み、見つかった…」

「正月早々どうしました中川さん」

富寄碩にオランダ語を学び、本草学を田村藍水に学ぶ。また明和元年(一七六四 中川淳庵は祖父の代から小浜藩の蘭方医を務めた家系であったが、 山形藩医の安

年)には平賀源内と共に火浣布を造ってもいた。

火浣布とはもともと中国南部 にも「火ねずみのかわごろも」と登場する。 で織ったもので火に投入れても焼けないと伝えられる織物だ。 の火山 に住むとされる想像上 の動物、 あの 火ねずみ 「竹取物語 の毛

平賀源内は 石 綿 で同様な織物をつくり火浣布と名づけたのだった。

そして中川淳庵は、 カピタン(オランダ商館長)が江戸に来ると逗留した長崎屋

にしばしば訪問して最新の情報を聞きたがった。

駆け込んできた淳庵がいうには将軍へ挨拶に来たカピタンが阿蘭陀語で書かれた 「ターヘル・アナトミア」と「カスパリユス・アナトミア」いう書物を見せてく

れたが、これぞ我らが求めていた書物なのだと興奮して話した。 「そこには腑分けの詳しい図が多々載っているのですが、驚いたことに昨年我ら

が見たものとそっくりなのです杉田さん。

しかも…」

「しかも…」

「カピタンが言うには、 私が欲しいなら譲ってもよいと申すのです」

「ほう、それは吉報」

なるのであればとあなたの所に飛んできたんです」 です。これは諦めるしかないと考えましたが数日待ってもらい、もし金が何とか しかし杉田さん。残念ながらその額は到底私が捻出できる金額ではないの

中川淳庵 は息を切らしながら抱え込んでいた風呂敷包みから革表紙の二冊の本を

丁寧に取りだした。

「カピタンが貸してくれたのです」

.も驚喜して「ターヘル・アナトミア」のページを送ってみて呻 ·
った。

昨年秋に己の目で見た事実とぴたりと合致していたからだ。 には人間 玄白は阿蘭陀語はまったく読めなかったものの、 の身体の骨格や臓器の位置などが克明・精緻に描かれていただけでなく その解剖図には驚愕した。そこ

「な、中川さん、これは何としても欲しい…」

杉田玄白は明和二年(一七六五年)には藩 るようになった。 年)には父の玄甫が死去したため家督と侍医 しかしやはり淳庵がいう大金は工面できない。 の奥医師となり、 の職を継ぎ、 新大橋 明和六年 (一七六九 の中屋敷へ詰め

ただし玄白は諦めず、自分がなんとかするからしばし待ってくれと言い残し藩邸

に飛び込んだ。

玄白は藩の家老を説得し、金を工面してもらい、淳庵が持ち込んだ「ター

実は新年早々長崎から帰路についた前野良沢も井之上新一郎 ヘル・アナトミア」を購入することができた。

同じく「ターヘル・アナトミア」を入手していたのだ。 や平賀源内と会った

良沢は藩医だったものの懐具合は藩主からの支援もあり玄白や淳庵より暖かかっ

ONTLEEDKUNDIGE TAFELEN,

Benevens de daar toe behoorende

AFBEELDINGEN

LN

AANMERKINGEN,

WaarinhetZaamensteldesMenschelykenLichaams, en het gebruik van alle des zelfs Deelen afgebeeld en geleerd word.

DOOR

JOHAN ADAM KULMUS,

Doctor en Hoogleeraar der Genecs- en Natuurkunde in de Schoolen te Dantzich, en Mede-Lid van de Keizerlyke Academie der Weetenschappen.

In het Neederduitsch gebragt

DOOR

GERARDUS DICTEN:

Chirurgyn te Leyden.



Te AMSTERDAM,

By de Janssoons van Wasserge

MDCCXXXIV.

VOORREEDEN

VAN DEN

VERTAALER.

BESCHEIDEN LEEZER,

An wat dienst de Ontleedkunde, of de kennisse van
het zamenstel des Menschelyken Lighaams, voornaamentlyk
voor de Heelkunde is, getuigen eenstemmig alle die geenen, welken in
deeze Kunst ervaaren zyn, als zynde
de hoofd-zuil, daar het gantsche gebouw der groote Heelkunst op rust,
dewyl uit de kennisse en plaatzing
* 5 der

しかし良沢と玄白はまだお互いの動向を知る由 もなかった。

勿論良沢が「ターヘル・アナトミア」を他の数冊 のためではなくあくまで阿蘭陀語の書説を学びたいからであった。 の蘭書と共に入手したのは医学

とはいえ幾多の偶然が重なり、時代が動きだしたのである。

「ターヘル・アナトミア」を手に入れた杉田玄白は早速松平春貞にとある願いを

するため屋敷を訪れた。

「春貞さまは南北両お奉行ともご昵懇と伺っております。 お願い続きで申しわけ

ございませんが…」

杉田玄白は両手を畳につけ頭を下げた。

俺にできることであればよいがな」「まずはお顔を上げなされ杉田先生。

春貞は磊落に笑った。

の内容が昨年山田浅右衛門宅にて検分した腑分けの事実とぴたりと合っているこ 杉田玄白は「ターヘル・アナトミア」の入手にまつわる一連の出来事を話し、

とを目を輝かせて語った。

「井之上先生からも同じことを聞かされましたぞ…」

春貞は口を挟んだ。

頷いた玄白は、この事実は長年の疑問が氷解し、蘭方による身体の仕組みが事実 であることを証明している。このことを是非多くの人たちに知らしめるためこの 「ターヘル・アナトミア」の読み分けに取り組みたいのだと力説した。

読み分けとは翻訳のことだ。

「ただし、難問がございまして…」。

同席した井之上新界が

自身が腑分けを体験し、検証したことを公にする必要がある訳です春貞さま」 「このターヘル・アナトミアが正しいということを我らが証明し認めるには我ら

と力説した。

「なるほど、でなければお主たちは単に阿蘭陀語の本を訳したというだけに終わ

ってしまいますな」

春貞が理解を示した。

「そうなのです」

「そこまでは分かったつもりじゃが、 この爺にどうしろと申されるのか」

春貞の言葉を受けて杉田玄白は、

公言すれば山田浅右衛門様のご好意が無になるどころかお咎めがあるやも知れま 「このまま我らが腑分けを見学した事を隠しては先に進みませんし、 かといって

「うむ…」

せぬ」

持ち、 後はお上による正規な腑分けを是非体験したいのです。 ナトミア』の正確性を我ら自身が公言主張できます。 「山田浅右衛門様宅で我ら、 おかげを持ちまして『ターヘル・アナトミア』の入手に繋がりました。 蘭書にある人の身体の仕組 であれば『ターヘル・ア 一みが正しいことに確信を

腑分けは極一部とはいえ行われていると聞きます。そこで是非春貞様にお口添え いただきたく奉行所公認の腑分けの機会に我らを同席させていただきたいので

す

杉田玄白は些か早口で言い、頭を再度畳に擦りつけた。

「承知した。 俺の物言いがどれだけ御利益あるかは不明だが、 その程度の事なら

ァいこと[。]

自巻き春貞15_決定版_新表紙.hagorom

南町奉行の牧野成賢どのに願ってみよう。

もし北町の管轄で機会があればそれでもよいとな。

春貞が快諾すると、 直接お主の屋敷に知らせろと…合わせてな、願っておこうぞ」

玄白と新界が平伏した。「有り難き幸せ」

四

三月三日の夜のことだった。 杉田玄白の屋敷に北町奉行曲淵甲斐守の家来だといり。

う得能万兵衛という者が一通の文を持ってきた。

それによると明日千住 でもしご希望であればおでかけくださいとの内容だった。 の骨が原で腑分けが行われる。 春貞殿のご紹介でもあるの

夜半だったが杉田玄白はその文を持ち、春貞の屋敷に井之上新界を訪ねて来た。 「井之上さん。春貞さまのおかげで機会ができました。ついてはあなたもこられ

ませぬか」

と熱のこもった報告をなした。

よう」 分けそのものは先般の機会で十分です。杉田さんのご報告をお待ちしておりまし 「ふうむ。行きたいのは山々なれど、私には診療所を守る役目がございますし腑

新界は意外とさっぱり答え、

「しかし、できれば長崎組の蘭方医たちには同席させたいですな杉田さん」

井之上新界はそう続けた。

誘いすることにします。春貞さまにはくれぐれも宜しくお伝え下され」 杉田玄白は興奮冷めやらぬ態で急ぎ春貞の屋敷を後にした。 ん。ただ時間もありませんので中川さんと、そう…長崎から戻った前野さんをお 「はい。このような滅多にない好機、私だけで独占すべきことではございませ

ところで、杉田玄白著 「蘭学事始」 にはこうした腑分け体験への経緯が紹介され

らせと共に丁寧な見学の勧 ているが、 何故 中津藩 医だったとは !めがあったかについては明言されていな いえ玄白に北 町 奉行所 の奉行から腑 6.1 分け の知

実は春貞の推挙が功を奏したのであった。

翌 四 一日に杉田玄白が待ち合わせの茶店に出向くと中川淳庵と前野良沢が嬉々とし

て待っていた。

「杉田さん。今回のこと恩にきます」

前野良沢は玄白に頭を下げただけでなく懐より一冊の蘭書を取りだした。 『ターヘル・アナトミア』

「これは昨年長崎にいたとき偶然に手に入れた

阿蘭陀の解剖書ですが、 折角の機会ですからこの書の図と比べてみたいと持参し

ました」

と説明した。

無論杉田玄白も同じことを考え「ターヘル・アナトミア」を持ってきたのでそれ 玄白と前野良沢は奇遇だとお互いの手を取り合って喜んだ。 を良沢に見せ、入手した経緯を説明したが、どうやら二冊は同じ版のようで杉田

がこれまでほとんど行き来もせず交際も少なかったが、 実は杉田玄白にとって前野良沢は年上の先輩格であり、当然知り合いでは 医学についての志の熱い あった

という

ことをよく知っていたため誘ったのだった。

「前野さん、ひとつ聞いていただきたいことがあると同時にお約束していただき

たいことがあります」

玄白は歩きながら神妙に切り出した。

「はい、なんなりと」

その答えを待って玄白はこの腑分けに同席できるようになった経緯を手短に説明

と切り出し、腑分けの見学結果から何年かかってもこの「ターヘル・アナトミ もし前野さんが江戸にいらっしゃれば当然お誘いいたしましたが…」 まにお会いしたのをきっかけに中川さんと非公式に腑分けを体験しました。 「要はそういうことでして、昨年向島の松平春貞さまのお屋敷で山田浅右衛門さ

ア」を読み分けしたいと思ったこと。ただしそのためには「ターヘル・アナトミ ア」の正確性を証明するため是非とも自分たちが腑分けを経験したことを明言し

なければならない。

させて欲しい旨を厚かましくもお願いしたのです。 「そこで南北の御奉行にもお顔の利く松平春貞さまにそうした機会があれば見学

そういうわけで前野さん。 て見学しますが、どうか山田浅右衛門さまのお屋敷でそういうことがあったこと わたしと中川さんも腑分けは今回初めての 体験だとし

は内密にしてほしいのです」

杉田玄白は先輩の前野良沢に願 77 良沢は笑みを浮かべて快諾してくれた。

肝煎のご子息、井之上新一郎さんとお会いしましたぞ。 「そういえば長崎の吉雄耕牛先生宅で松平春貞どののお屋敷内にある向島診療所

そろそろ江戸に着く頃だと思いますがな。

その折り、一度伺わせて欲しいと願いましたが、

させてくだされ」

良沢は破顔した。

その後、 一同はうちそろって骨が原に用意されているという腑分けの場に向かっ

現場に出向 いてみると執刀する者は九十歳になるという老人だったが熟練してい

るとかで手際 の良 77 準備をはじめた。

見ればそこに仰向けに置かれていた首のない屍は五十歳ほどの女だった。

これまた機会を見て是非ご一緒

「よろしいか…」

老人の一言で玄白ら三人が同時に頷いたが、 良沢の生唾を飲み込む音が聞こえ

た

老人は刃物を手にした刹那、 に突き立て、そのまま腹まで引いた。 無造作とも思える素早さで切っ先を両乳房の真ん中

そして…。

「よろしいか。これが心の臓、これが肝臓…」

と説明を始めた。

「ご老人、そこは何というのか」

中川淳庵が指さして問うと、

「ふむ。わしは名称は知らぬ。だけど若い時から数体腑分けを手がけてきたが、

いずれの腹の中も、ここにこのようなものがあるな」

と答えた。

杉田玄白と前野良沢は手にした「ターヘル・アナトミア」の解剖図と懸命に照ら

し合わせている。

「ううむ。それは小腎(副腎)だな…」

「まったく同じだ」

前野良沢が感嘆の声を上げた。

腑分けの老人が、

「今まで腑分けの度に見学の医師 の方々に同じ説明をしてきたが、 誰一

これは何だ』といった問いをされたお方はいなかった。

お前さん方が初めてじゃ」

『それは何、

と言う。

「ほう。さようですか」

杉田玄白が如才なく応じると、

れが腎臓』と切り分けして示すとそれだけで納得し『自分はじかに腑分けを見て 「お医師の前で申すのも憚られるがのう、これまではわしが 『これは肝臓 \mathbb{F}_{λ}

内臓を確認した』と言う。しかしそんなんでは眼を瞑って象の鼻を探り、

象を見てきたというようなものよ。

実に頼りないが、あなた方はそれらの人とは違うなあ」

と老人が破顔した。

「ところでご老人。このご婦人はどのような罪で打ち首となられたのか」

好奇心旺盛な玄白が問うと、

たそうじゃ。 「わしも詳しい事は知らされておらぬがこの老婆は一時半ほど前に首を落とされ 首は獄門台に架けられて晒し首になっとる」

と答えた。

らわれたらしい。 後から知ったことだが老婆は京都生まれの青茶婆と呼ばれた悪女だといい、子供 の養育料を目当てに子供を貰い受けては、何人も殺すという大罪を犯した罪で捕

を言いつつその場を離れたが杉田玄白が、 杉田玄白らは腑分けされた屍に両手を合わせ、立ち会いの役人と老人に丁重な礼

「いっそのこと骨の形も確認しようではありませぬか」

と言い出し、刑場に野ざらしになっていた骨をいくつか拾い取り「ターヘル・ア ナトミア」と比較 して見たがこれまたぴたりと合致し ているのが分かった。

「これまでも官医たちは何度も腑分けの場に立ち会ってきたはず。 いままで何を

淳庵が言うと、

見てきたのでしょうかな」

れまでは日本人と西洋人は人体に違いがあると済ませていた感がありますな」 「不審はあったようじゃが、体面第一で謎を解く情熱もなかったようですな。

良沢も非難めいた口ぶりだった。

帰り道の三人は皆饒舌だった。

体の真の形も知らず日々医業を務めてきたのはまことに面目ない次第…」 というものではありませぬか」 して医術を行うなら、医業をもって天地の間に身を立てていく申し開きもできる は…。いやしくも医を業とし主君に仕える身でありながら、その基本とすべき人 「しかし、これだけ古来の医学書に頼るだけで事実を見ず気がつかなかったと 「今回の実地検分に基づき、おおよそでも良いから身体についての真理を理解し

「まことに、もっとも千万、同感です」中川淳庵と杉田玄白が決心を述べると前野良沢も、

と感動していた。

ふと中川淳庵が、

「しかしご一同。 我ら三人、帰路の足取りも軽くこうして喜んでいますが、それでよろしいの 腑分けとはいいますが、人一人が刑死したからこそ実現したこ

でしょうかな」

と申し訳なさそうに呟いた。

はござらん。 のですから、それはそれ…これはこれでしょう」 「ふむ。気持ちは分かりますが中川さん。我らが喜んでいるのは死に人のことで 腑分けの結果が『ターヘル・アナトミア』と合致していたその事な

杉田玄白が言い切った。そして、

「なんとかしてこの『ターヘル・アナトミア』の一部でも読み分けができたら、

今日の治療のうえにも大きな利益となるはずです。

とはいえいちいち通詞たちに聞くこともできんでしょうから、自分たちの手で読

と呟くと良沢はすかさず、

み解く方法はないものか…」

「うむ。わたしはかねがね蘭書を読み始めたいと念願していたものの志を同じく

する友人がいなかった…。

いつもこのことを嘆き思うだけで日を送ってきました。

もし皆さんが読み分けをやってみようと希望されるなら、 わたしは前年長崎で阿

蘭陀の言葉も少しは勉強したつもりです。

それを種としてご一緒に読み掛かっては みては いかがだろうか」

と提案した。

玄白と淳庵は喜び、

「それはなによりも喜ばしいことです」

「ひとつ奮起して覚悟を決め、 精一杯がんばってみましょうぞ」

と言い切ると前野良沢は満面の笑顔で、

「では、善は急げの諺もある。 っさっそく明日わたしの家にお集まりくださらん

か。工夫の方法を考えてみましょう」

と決意のほどを示し、その日はめいめい別れたが、 歴史が動いた瞬間であった。

骨が原にての腑分けを体験した杉田玄白、 いて読み分けのとっ たら吉日とその翌日から前野良沢の屋敷に集まり「ターヘル・アナトミア」を開 かか りを探ろうとしていた。 中川淳庵そして前野良沢らは思い · 立っ

ちなみに前野良沢の屋敷は中津藩中屋敷にあったが、 現在の地でいうところの中

央区明石町にある聖路加国際病院付近だった。

ともあれその日から新しい顔も加わっていた。

そ ñ は 玄白 が推挙 した二十一歳 0 医 師 及び蘭 学者であ る 桂 Ш 甫 周 だ った。

桂川 家に仕えた幕府奥医師であり、特に外科の最高 家は 江戸幕府第六代将軍・ 徳川 家宣 の侍医を務め の地位 である法眼を務め、 た桂 Ш 甫 筑 以来代々将軍 その為

蘭学書を自由 に 読 む事が許され てい た から即 戦力を期 待さ ħ 7 ζ **,** た。

しかし、それから度々一同が良沢の屋敷に集まったもののほとんど進展がなか

7

互いに睨み合ってみてもなにも解決しない…。

「これでは櫓も舵もない船で大海に乗り出したようですな」

玄白がため息をつくと、

分かってます…。 「ここに人体 の前向き、 したがってその図と説 後ろ向きの全身図があるが、そこに記され 崩 の文字とを照らし合わせてみるのがと 7 77 る名が 称 は

っかかりでしょうかな」

良沢が呟き一同が賛同した。

っていなか いえ少しは知 つ たから文章の前 っている単語があっても、 後が 一向に理解できなかっ 助詞のたぐいさえはっきりとは分か た。

それでも月に七・八度集まって分かるところから少しずつ訳し、 分からない 箇 所

は印を付けて先に進むという方法をとったが、次第に印をつけた箇所が膨大にな

っていく…。

時は無情に過ぎていくが、四人は諦めなかった。

年が おりからの南西 明け、 明 和九 の風にあおられ、麻布、京橋、 年 (一七七二年) 二月二十九日、 日本橋を襲い、 江戸に 火 事 江戸城下の武家屋 が起こった。

敷を焼き尽くし、 神田、千住方面まで燃え広がった。

を焼い 一旦は小塚原付近で鎮火したものの、暮れ六つ時に本郷から再出火。 た。 駒込、

や再出火、 昼頃には鎮 東に燃え広がって日本橋 火したかに見えたが、三月一日の 地 区は壊が 滅 明け四つ時に馬喰町付近からまたも た。

然と眺めるしかなかったが、 しかし大川対岸の春貞たちには炎が江戸の町を舐めるように拡がっていく様を呆 日 脈、 大変だ。大川の向こうは全滅かも知れやせんぜ」 まだそうした詳細な被害は分かるはずもなかった。

- 49 / 195 -

達が 六十五 門前 蔵 に集まってきた。 になった留吉が箒を杖代わりにして背を伸ばすと、 春貞を始 め 屋敷 の者

と孫のお蘭が指に針を刺しながら作ったもので、 りしたも 小袖は亡き堀田 春貞は、 縦縞 のの春貞は好んで袖を通していた。 鉄色の小袖に派手な褞袍を羽織ってい 一万之助の妻秋子が縫ってくれたものだが、 左右の身頃が少々いびつだった たが無腰だった。 褞袍 は裁縫の練習台に

細身になったが、 七十五歳になる春貞は髪は真っ白ながら肌の艶も良く腰も伸び、若い頃より些か ただ立っているだけの姿にもまったく隙が無かった。

「爺様。 半鐘の音が怖いほどでございます」

お蘭が後ろから春貞の左手を両手で握りながら震え気味に呟いた。 確 かにな。 城はでえじょうぶだろうかな…。

しか しお蘭。 冷てえ手だな

春貞はお蘭 の肩に己の右腕を巻き付けながら言った。

が甘え声を出しながら腕を絡めてきたときのことがよぎった。 脳 裏 に ふと婚礼前 のことだったが、 小石川養生所 に向 かうとき、 妻となる

すでに五十年も前のことだが、 春貞の顔に柔らかな笑みが浮かんだもの の誰も気

づかなかった。

お蘭は春貞と亡き妻、幸江との一子であった理子の忘れ形見だ。

お蘭を産んだが、産後のひだちが悪く命を落とした。そして一之介は十年前に麻 理子は宝暦二年に水戸藩の下級武士であった皆森一之介と所帯を持ち、 四年後に

疹で死んでいる。

り、 その後春貞らに育てられ美しく育ったお蘭は十六歳。 目に入れても痛くないという溺愛の孫だった。 春貞ただひとりの血族であ

お蘭は、

「あたしは爺様以上の男でないと嫁がない」

というのが口癖だったし、 剣の腕も両親の血はもとより春貞と幸江の血なのか、

すでに春江館では目立つ腕前だった。

確かに半鐘があちらこちらから怒ったような音を立てているのが風に乗って聞こ

えてくる。

「こ、これは大火事ですぞ。明暦の大火並になるかも知れませんな。

新 郎、 火傷 に効く薬をすぐに使えるように準備をしておけ。

怪我や火傷の患者が殺到するだろうからな」

向島診療所肝煎の井之上新界が息子に声をかけた。

「はい。すぐに確認します。

お輝ちゃん、手伝ってくれ」

新一郎が声を張り上げた。

「承知しました。坊ちゃん」

お輝も新一郎に続いて診療所に飛び込んでいった。

「しかし、 新一郎も二十一歳。ぼっちゃんでもあるまいが…」

と新界が苦笑すると、

「しかし先生。こんなに小さい時分から新一郎ぼっちゃんの子守を嬉々としてし

ていたお輝ですから仕方ないですよ」

お輝 での母、 お文が左足の義足を気にしながらも手で自分の腰の高さほどを示し笑

いながら言い切った。

な

「大川のおかげで、こちら側には延焼はねえと思うが、こりゃあ大変な大火事だ

- 52 / 195 -

春貞も独り言のように呟いた。

「でも春さん、風に乗って火の粉が飛んでこないとも限らん。 用水桶をすぐ使え

るように用意しておきましょうぞ」

米道格左衛門が木刀を帯に差して踵を返した。

「格左。それは有り難いが、歳を考えて無理するなよ。

若い奴らにやってもらえ」

春貞が格左衛門の後ろ姿に声をかけると格左衛門はそのまま右手を上げて奥に引

っ込んだ。

そういえば格左衛門も六十七歳になっていた。

「とはいえ旦那。このお屋敷の屋根は瓦葺きだ。

多少の火の粉くらいは大丈夫でしょう」

留吉が振り向き、母屋の屋根を振り仰いだ。

「そうだな。知ってのとおり、昔屋敷が全焼したとき大岡さまの推した瓦葺きに

拘ってよかったな。

しかし、俺たちは何のつっかえ棒にもならねえ。太子堂や相模屋も全焼かな…。

岩次郎親分たちや読売屋浅太郎は大丈夫だろうか…」

そんなことを呟くと日本橋あたり全域が炎に包まれているその中に大岡忠相 の顔

が浮かんだ。

「春貞さま」

春貞の背後で静香が声をかけた。

静香はこれまで独身を通し、春貞の妻幸江が亡くなってからは奥向きの役目を一

手に引き受け粛々とこなしていた。

普段は今は亡き公儀御庭番の弥三郎が仕込んだ忍びの技を隠し、もともとが武家 った。 の娘だった静香は立ち振る舞いも優雅だったし屋敷にとって不可欠な存在でもあ

「おう、なんでえ」

「これだけの大火でございます。

蔵の米や甘藷を放出される準備をいたしましょうか」

「そうだな。やりようはまだ分からんが近々そうなるだろう。

道之助に備蓄の詳細な数を確認しておいてくれ」

「かしこまりました」

春貞の屋敷の奥には二棟の倉庫があり、 享保の大飢饉の教訓からその後、 米と畑

[の明け四つ半頃、読売屋の浅太郎が息を切らしてやってきた。 れる甘藷をできるだけ備蓄することを心懸けてきた のだった。

「旦那、は、春貞の旦那はいらっしゃいますか。

ご注進だあ…」

と叫んで母屋の式台にへたり込んだ。

「浅太郎さん。お前さんももう若くはねえ。

無理して走ったりしない方がいいぜ」

春貞が笑いながら右手を差し出すと、 躊躇なくその手につかまり立ちした浅太郎

は居間に座すのももどかしい様子で火事の様子を喋りだした。

う。 浅太郎によると、火元は目黒行人坂の大円寺でなんと坊主の放火が原因だとい

後の話だが死者は一万四千人、行方不明者は四千人を超える見込みで類焼した町 山王神社、 は九百三十四、 神田 明神、 大名屋敷は百六十九、 湯島天神、浅草本願寺、 寺は三百八十二を数えることになった。 湯島聖堂も被災した。

浅太郎は一気に喋った。 「で、あの老中田沼 様のお屋敷も類焼にあったようでございますよ」

「放火か。こりゃあえれえことになったな」

「へえ。火頭改(火付盗賊改方)が動き出したそうでございますよ。

残っておりませんし、どうやら八丁堀あたりは何とか類焼をくい止めたようです なにしろ類焼が広範囲でまだ全体はつかめていませんが、日本橋あたりはなにも

意に召り過息がくこのとこと、 が小石川養生所も被害を受けてるようでがすな」

浅太郎の鼻息が収まったとき、

に鬼籍に入ってしまった。しかし水道町には金次親分らが、須田町には岩次郎や 「浅太郎さん。承知のように俺たちが知り合ったときと違い、 多くの縁者は すで

三郎親分がいるしな。

もしそうした人たちの末裔やらが困っていたら大川を渡りここに避難しに来いと

言ってくんな。

ここなら飯だけは当分なんとかなるからな。

そうそう、お前さんの家はどうしたい」

春貞が問うと、

「あのぼろ長屋、紙くずみてえにあっという間に燃えてしまいましたな」

と事も無げに言い切った。

そのとき、

「春貞さま。定刻になりましたので膳を運んでよろしゅうございますか」

秋子が声をかけた。

衛門の血を引いたか剣より経済に明るいために助左衛門亡き後、 秋子の夫堀田 の責任者として働 ているし、 - 秋子は料理人富四郎直伝の腕を買われて富四郎亡き後、これまた料理 万之助はすでに五 いて いた。 年前に亡くなったが、一子道之助が祖父田 その後継を務 宮助左

「おっ、もうそんな時間か。

それでは運んでもらおうか。

秋子、見ての通り腹っぺかしが一人追加だが頼むぜ」

と声をかけると浅太郎が嬉しそうに頭を下げた。

居間 に使用・ 人は別として屋敷の一同が揃ったところであらためて全員をご紹介し

てみよう。

と一子道之助、 春貞とその孫娘のお蘭、 井之上新界とおよし及び長崎帰りの新一郎、 米道格左衛門と妻夏穂、 留吉と妻奈美、静香、 お文とお輝だっ 堀田秋子 た

留吉と妻奈美の一子吉太郎は新一郎と交代でいま長崎 に遊学中であった。

そして末席には読売屋の浅太郎が家族のような顔をして座っていた。

「いただきます」

との春貞の一声にそれぞれが箸を取った。

それぞれ酒を嗜む者の膳には銚子と盃が置かれていた。

「そういえば浅太郎さん、お前さんはいくつになったい」

春貞が声をかけた。

「へい、お陰様で還暦で…」

浅太郎が事も無げに答えた。

「ほう。人のこたあ言えねえが、随分と年寄りになったもんじゃあねえか」

と茶化すと、

「まったく光陰矢のごとしとはよく言ったものでございますな。

旦那は矍鑠としていらっしゃいますが、このお屋敷も随分と変わりましたなあ」

「違えねえ。

と言いながら盃を呷った。

若い者が活躍するようになった一方で愛すべき馴染みの者達が次々と鬼籍に入り

やがった。 幸江はもとよりだが理子、 万之助、 富三郎、 助左衛門、 それに小川笙

船先生と…皆いなくなりやがった」

春貞が遠くを見る目で呟くとお蘭が春貞の肩に頭を寄せた。

「あらら、済みませんな。 湿っぽい話になっちまった。

上の睨みの隙間をぬって生きてる商売でがすが、あの旦那はまれに見る名同心で ついでにいうと八丁堀の伊丹同心も一昨年亡くなられましたなあ。 あたしらはお

浅太郎が手酌をしながら顔を上げると春貞は俯いてた。

「いけねえ。火に油を注いじまった」

ございましたよ」

と恐縮すると、

「俺も歳を取ったぜ。どうにも涙もろくていけねえ。

そろそろ幸江が迎えにくるかな」

寂しそうに笑った。

られたらきっぱりとお断りしてください。 「爺様はまだまだ長生きします。 蘭が長生きさせてみますので婆様が迎えに見え

いいですね爺様」

巻き春貞15_決定版_新表紙.hagorom

春貞は破顔し嬉しそうに盃を仰いだ。お蘭が嫁にいくまで迎えは断ろうぞ」「わかった、わかった。ありがとうよ。お蘭がむきになって春貞に迫った。

__

四月の三日。春貞と格左衛門が朝稽古を終え、 春江館を出たとき隣接している竹

藪に怒号が響いた。

何ごとかと二人が駆けつけると坊主頭の男が抜き身を振り回しており、すでに一 人が切られて倒れ、後の二人が腕まくりし取り押さえようと挟み込もうとしてい

「逃げられん。観念しろ」

と叫ぶものの必死の形相の男に圧倒されている。

身を振りかざした途端宙に舞って地べたに叩きつけられていた。 そのとき春貞が音もなくすっと坊主頭 の男に近づいた。それに気づいた男は抜き

「どうした」

春貞は二人に問うたが格左衛門は気絶している男から抜き身を取り上げている。

「へい。恐れ入りますが事情があってお話しできません」

一人が済まなそうに頭を下げると背後からきちんとした身なりの武士が現れ「早

く連れて行け」と命じた。

「おいおい。ここは俺の屋敷の土地だ。

そして取り押さえたのもこの俺だ。

こいつがなにをしたのか、お前たちは何者なのかくらい話しをしても罰は当たる

まいよ」

春貞がいうと、

「我らは火付盗賊方である。 役儀につき追っていた者を連れていく」

とぶっきらぼうに言った。

「ほう。お主たちが何者かは分かったが、こいつはなにをした」

春貞が珍しく執拗に問うた。

別の数人も姿を見せた。

「うるさい。邪魔立てすればお前たちも連行するぞ」

長十手を春貞に向け武士が一歩踏み出した刹那、春貞の脇差しが「チーン」 と小

さく鍔鳴りした。

「あっ」

刹那、武士が腰を押さえて立ちすくんだ。

袴の前結びが切られて半身が落ちかかっていた。

「お、おのれ。我らに刃を向ければただでは置かぬ」

憤怒の形相で落ちた袴はそのままに刀を抜いた。

「分からねえ奴だな。ここは俺の屋敷よ。

役儀とはいえこうして松平春貞が筋を通して問うているのが分からんか。

馬鹿者めが」

火付盗賊方の与力か、男が決意し刀を構えると後続の者たち四人も刀を抜い た。

「ふん。どうしようもねえ石頭たちよなあ格左」

「…。。 と言いながら春貞が半歩前に出ようとしたとき、

「待て。あいやしばらく…」

という太い 声が響 いて男たちが刀を下げると同時に頭も下げた。

現れた男は着流しだったが編み笠を外しながら、

「お前たちが十人東になっても敵うお人ではない。

刀をひけい」

と命じた。

中年の恰幅が良い武士はつかつかと春貞の前に出て頭を下げ、

「失礼いたした。

それがしは火付盗賊方長官長谷川宣雄と申す。

役儀とはいえ大変ご無礼をいたしましたが、その男は先月の大火の火付犯人とし

て我らが追っていた者。

どうやらお手前が取り押さえてくだされたようですが、 お引き渡しいただけまい

カ

と願った。

四半時の後、坊主頭 の男は引き立てられて行ったが、長谷川宣雄と名乗った男は

春貞の勧めで客間に座していた。

「お初にお目にかかります。

松平春貞どのの名は存じておりましたが、それがし火付盗賊改加役に命じられた でお会いする機会がございませなんだ」 のが昨年の十月でございましてな、まだまだ新米でござる。それにあれやこれや

と破顔した。

いなことでございましょうや」 「さようでしたか。しかし泣く子も黙る火付盗賊方長官と出会わなかったのは幸

春貞が笑うと宣雄も、

「いかにも…確かに」

と笑った。

「我らのお役目は役方(文官)である町奉行では手に負えない凶悪犯を取り締ま

る専任の番方(武官)でござる。

に武装集団であることもございます。そして犯罪の痕跡を消すために家屋に火を よく町奉行とどこが違うのかと問われる場合がありますがな、昨今の凶悪犯は時

放つといった手口も増えました。

そうした場合に非武装の町奉行所では手に負えないわけで、必然我らのやり方は 厳しきものとなり、 まあ嫌われがちでございます」

と火付盗賊改を説明した。

詳しい事はこれからの詮議となるが極刑は免れまいと呟いた。 そして宣雄が言うには、先の男は武州熊谷無宿の真秀という坊主だそうで、

「火付けの犯人であれば火刑も仕方ありませぬな。 あれだけの大火となりました

しな」

春貞の隣に座していた米道格左衛門が口を開いた。

「さよう」

そのときお蘭が茶を運んで来た。

「これはこれは恐れ入る。

娘御でございますか。どこか似ていらっしゃるような_

宣雄が一瞬の鋭い目付きを解いて訪ねた。

「いや、孫娘でござる。

どうにも我が家系は女系のようでしてな。 男の子供や孫には恵まれませんでし

たし

お蘭の煎れた茶を口にしながら春貞が言うと、

「いや、 それがしには二十七にもなる息子がおりまするが、 事情がありひねくれ

者で困っております。

どと悪さ仲間から呼ばれいきがっており、なにかと問題を起こす困った息子でご 父親がこのようなお役であるのに銕三 郎は…息子の名でござるが 『本所の銕』な

ざる。

女子の方が可愛くて良いのではございますまいか」

宣雄も茶に手を伸ばしながら苦渋の表情をした。

しばし雑談の後で宣雄は、

「春貞どの。これを機会にお見知りおきくだされ。

失礼いたした。

本日はお陰様にて火付盗賊改として面目を施すことができ申した。

あらためて御礼申し上げる」

と言い残して屋敷を後にした。

同年六月二十一日、 捕縛された坊主は市中引き回しの上、 小塚原で火刑に処され

た。

方、 同年十一月十五日に従五位下備中守に叙任される。 長谷川宣雄はこの功績が評価され、十月十五日に京都西町奉行に栄転とな しかし翌年六月二十二

育巻き春貞15_決定版<mark>_新表紙.hagoro</mark>m

日 奉行 在 任 一中に京都 で病死した。 享年五 十五 歳だっ

さて、 事と喧嘩は江戸の華というが、多くの死者と犠牲を出した明和の大火は江戸三代 大火として記憶されることになる。 放火犯が罰せられたとしても江戸 の町 の復興がそれで進むはずもない。

ば死者の数は少なかっ ただし八代将軍吉宗の意を汲み、 例えば瓦屋根の推奨や火除地 たとされる。 町奉行大岡越前守忠相が真摯に取 の整備などが功を奏し火災の規模に比較すれ り組んだ防火

=

しまったからであった。 った。 この大火で井之上新界が予想 なにしろ大川 の対岸は大方が焼け野原となり町医者の屋敷 したとおり、 向島診療所に患者が殺到することにな の多くも焼けて

火傷 の患者は勿論 怪我、 煙を吸って意識 のない者などが次々と舟で運び込まれ

た。

制で、 診療所は肝 助手および下働きはお文とお輝親子が奮闘してい 煎 の新界は勿論、 妻およしと長崎帰りの新米蘭方医、 た。 新 郎 の三人体

滅状態でほとんど燃え尽きてしまったから怪我人も多かったが向島診療所 ような施設なのかはこの頃には行き渡っていたこともあり大きな混乱はなかっ 患者は町人、 商人だけでなく武家も多かった。 なぜなら江戸城 下の武家屋 がどの 敷 は 壊

ただし診療部屋は戦場のようでもあった。

やはり患者の多くは火傷を負った人たちだった。

「そこにお座りなさい。 いますぐその腕に薬を貼るから楽になりますぞ」

新界が声をかけると職人と思われる男は、 「なあに、先生。この程度で泣きが入っては死んだ仲間に笑われまさあ。

ほ

んの

感謝しねえとなあ先生」

少しの差で俺はこうして生きてる。

る。

と鼻を啜ったその向こうで煤で汚れたままの小袖を着た娘が足が痛いと泣いてい

およしが、

「怖かったでしょう。でももう大丈夫よ。すぐに痛みは取れますからね」

と慰めている。

また新 自信となったようでどのような患者に対しても臆せず奢らず親切に接していた。 郎は若干二十三歳の青年だったが長崎で二年勉学に励んだことが大きな

「お輝ちゃん、包帯を多い目に持ってきてくだされ」

「はい、若先生」

新一郎とお輝が若々しい声を上げると診察室全体が和んだ。

診察室の裏ではお輝の母お文が湯を沸かしながら汚れた寝間着やらの洗濯物に向

かっていた。

その頃、春貞の姿は江戸城本丸にあった。

供として米道格左衛門と佐吉が継ぎ裃姿で従ってい た。

「本丸と西 の丸は辛うじて被災を免れたが、 回りの武家屋敷は壊滅ですな」

格左衛門が呻るように呟くと、

復興は急いでも一年はかかるでしょうし、 なによりも材木が不足しておるよう

で取り合いだそうですな」

佐吉も悲痛な表情で応じた。

春貞は火事見舞いに登城したのだったが、この年の一月十五日に老中となった田

沼意次に会うためだった。

茶坊主が導いてくれた一室でしばし待つと意次が足早に入ってきた。

春貞らは平伏し、

「本日は火事御見舞いとして伺いましたが、御老中ご就任お目出度うござる」

と言うと、

「春貞どの。そう形式張った挨拶は抜きにいたしましょうぞ。

他の者ならともかくお手前らはそれがしの師でございますでな」

意次は磊落に言いながらどかりと座ったがその膝元に春貞は佐吉から受け取った

包みを差し出しながら、

「お言葉ありがたいことでございますがご老中、これはささやかではございます

が火事見舞いでござる。

聞くところによれば田沼様のお屋敷も被災されたとのこと。

天下のご老中に余計な事と笑われましょうが、お屋敷の建て替えの費えにしてい

ただければ幸い…」

と包みを開くと二十五両の包金が十二包み並んでいた。三百両である…。

「ほう。これは何よりの火事見舞い。 春貞どのからなら安心し有り難く頂戴いた

しましょうぞ」

と破顔した。

真顔になった意次は、

「それがしの悪い噂は巷に多々流れておると聞きます。

田沼は賄賂で動くとな」

で顔を会わせても言葉もかけてこなかった者たちまでが勇んで近づいてきます。 「若い頃には思いもしませんでしたが、老中などというお役目になると、これま

まあそれ以上に商人たちは輪を掛けてわかりやすい…」

「ほう」

「自分たちに益となるであろう時は付け届けが急増いたしますでな」

意次はどこか寂しそうに呟いた。

「春貞どの。 間違ってはならないというか寂しいことに、金品を送り届ける者か

ら見て田沼意次という者などどうでもよいのです…」

「なんと…」

このことは突きつめると何と寂しいことではありませぬか」 「彼らが金品を差し出すのは田沼意次ではなく老中に対してなのです春貞どの。

意次は天井を仰いだ。そして、

しこの火事見舞いも失礼ながら見返りを云々ではなく真に田沼意次を心配してく 「しかし春貞どのはそれがしが小姓時代から一貫して暖かく見守ってくだされた

意次、心より御礼申し上げます」だされたからでございましょう。

天下の老中田沼意次が頭を下げた。

- 72 / 195 -

組

年が 杉田玄白たちの作業にも大きな影響が出始めた。 明けた直後に江 戸 の町の三分の一ほどが焼けるという大火があったわけで、

まり、 幸いに良沢の屋敷は類焼を免れたものの、広い範囲で後片付けと早速普請がはじ ヘル・アナトミア」読み分けへの集中を妨げた。 人の往来が激しいだけでなく材木を切る・ 叩く音も激しさを増し、

「これは…なんともなりませぬな」

杉田玄白と前野良沢らが話し合い、川向こうの春貞の屋敷の一室を借りられない 「しかし、このままではやりきれませんぞ」

かということになり、早速中川淳庵が井之上新界へ願いのため使いに走った。

診療所の居間で話しを聞いた新界は 「ターヘル・アナトミア」の読み分けの一 端

を手伝えるかも知れないと喜びその足で春貞に了解を求めた。

話しを聞いた春貞は、

「いいじゃあねえか。部屋ならいくつも空いてるし好きに使ってもらえ。

確かにここなら静かだしな…。

ただし、稽古中の気合いやらを五月蠅いと言わんでくれよ」

と笑った。

事実、いまも春江館では米道格左衛門と妻の夏穂が年齢を感じさせない威勢のよ い声を上げながら木刀を振るっていた。

そのとき静香が姿を見せ、

「春貞さま。 相模屋清右衛門さまがお見えでございます」

と声をかけた。

「おう、わかった。客間にお通ししてくれ」

春貞が腰を上げかけ、 新界に言った。

「先生。ここなら少しは長崎組のお一人として一緒に手伝えるのではないかな。

新界は嬉しそうに、 診療所のお役目も大切だがな、 時には気晴らしも必要だぜ」

- 74 / 195 -

と頭を下げた。 「ありがとうございます。 できればそうさせていただきます」

春貞が客間に入ると日本橋両替商相模屋の主人、 清右衛門が、

「お忙しいところ申し訳ございません」

と丁寧に頭を下げた。

「なんの。こちとら承知のように隠居の爺だ。

忙しいことなどなにもないわさ」

春貞は笑いながら清右衛門の前に座した。

ちなみに春貞と両替商相模屋の付き合いは長く、 享保九年からだからすでに四十

八年あまりにもなる。

春貞が妻幸江との婚礼の準備が進んでいたとき、 とはいえ現在の清右衛門は二代目であり、 鉄太郎と共に進めるうちに両替商相模屋の名が出てきたという事があった。 っていた八代将軍吉宗が襲われる事件が起きた。 の志を忠実に守り、 御店は盤石であった。 先代が養子に迎えた男であったが先代 得田新之助として市井を歩き回 その探索を親友の南 前 同心伊丹

今年最初の為替が近江屋さんと井筒屋さんから届きましたのでお知

らせにまいりました」

清右衛門は懐から書付を取りだし、丁寧に春貞の前に差しだした。

為替とは、 に多額の金を融資し、 春貞の実父である尾張藩三代藩主徳川 その運用で得た金の一部を春貞に送り続けていたがいまだ 網誠 の遺言で名古屋 の大店二軒

にそれが続いていた。

「ありがとうよ。

俺たちが日々を過ごしていくにはすでに十分な金はあるが、お陰でな…診療所も

続けていけるし、新一郎や吉太郎を長崎に行かしてやることもできた。

そういえばあの大火の影響はどうだえ」

静香が運んで来た茶に手を伸ばしながら春貞は訪ねた。

「それでございますよ、春貞さま。

手前どもの御店もご多分に漏れず被災いた の材木が取り合いでして…というより価格が高騰しなかなか思ったような具合に しましたが、 問題 は 新し い普請 0 ため

なんとかお店の形は整えましたが奥がまだまだでございまして難儀しておりま

はまいりません。

首巻き春貞15_決定版_新表紙.hagoromi

ا ا

清右衛門はふと疲れた表情を見せた。

「それに・・・」

「なんでえ」

「材木だけでなく大工の奪い合いも激しくなりまして、困っております」

分限者であるはずの清右衛門も頭を痛めているようだった。

「そうかえ。俺もたまには大川を渡って町の様子などを見てみねえことには駄目

だな。

いつまでたっても井の中の蛙だ…」

春貞は両手で己の頬を叩いた。

翌日、 春貞は久しぶりに静香を連れて大川を渡った。舟は留吉が操っていた。

留吉が真っ青に晴れた空を仰ぎながら言った。

「旦那とこうして舟で大川を渡るのも久しぶりですな」

「そうよなあ。歳を取るとすべてが面倒になってな」

春貞は髪は文金風、 無紋の黒い小袖に同じくかすかに横縞の織りが見られる羽織

たが、相変わらず首には椿 帯には父徳川綱誠 形見 の花が描かれた手ぬぐいが巻かれていた。 0 東田 口吉光作だと伝えら れる脇差しを帯びてい

「旦那。これからどちらに向かわれますので」

留吉の問 いに、

「せっかく大川を渡ったんだ。

まずは南町奉行の牧野さまにご挨拶としようか。

奉行所におられればよいがな…」

春貞が答えると留吉は

「承知」

と櫓に力を入れた。

「お奉行所でございますか…。

わたしは、お奉行所と聞くといまだに腰が引けます」

その昔、静香が春貞の屋敷で奉公をはじめるきっかけは、 静香が美しい笑みを浮かべながら呟くと春貞と留吉が声を上げて笑った。

静香が春貞の屋敷の蔵

に忍び込もうとして捕らえられたからだった。

「静香さんがそうならあっしもですぜ。なにしろ偽金作りに関連して江戸追放の

罪を負いましたからな」

留吉も苦笑しながら言い切った。

四半時後に三人は南町奉行所の奉行執務部屋に通され、すぐに奉行の牧野成賢が

せかせかした足取りで入ってきた。

このとき牧野成賢は五十八歳であり、 明和五年(一七六八年)に奉行となってい

7

「これはこれは松平春貞どの。お久しぶりでございますな」

成賢が相好を崩して声をかけた。

「こちらこそ。年寄りの気まぐれ、急なことでお許しあれ。

そうそう、御礼が遅れましたが昨年文にてお願いした件、ご快諾いただき早速杉

田玄白なる者へ使いをいただきました。

おかげで目的を十分に遂げたとの報告もありましたが、まことに面倒なお願いで

恐縮でござった」

春貞が頭を下げると牧野成賢は慌てて、

「とんでもないことでござる。

あの程度のことならこの奉行の一存でできることでもあり、容易いことです」

と応じた。

同席の静香が、

「嗚呼…腑分けのことでございましたか」

と問うた。

それがしの力ではございませぬ」ました由。

「さよう。北町の曲淵甲斐守どのにもお話しを通したところ早速ご配慮いただき

牧野成賢は謙遜し、

「まさか春貞どのが直々のお出まし。そのことだけではございますまい」

と問うた。

「いや、普段は隠居の身をよいことに屋敷でごろごろしておりますと世の中の動

きがなかなかわかりませぬ。

早々に復興をと考えても材木が高騰し、大工の奪い合いもあって思うようにいか で、御奉行。先日商家の主人から耳にしたことですが、大火の後ということで

真のことでございますかな…」

ないと聞きました。

春貞は真摯に思うことを問うた。

神妙に頷きながら牧野成賢は、

すが、 らせて価格の高騰を煽るという事態も起きております。 「なにぶん江戸の町の三割が被災したという大火。やむを得ない部分もあるので 材木の高騰は品不足というより江戸に運び入れる業者どもがわざと荷を遅

この点につきましては関八州と連絡を密にすると共に老中田沼さまにもご報告申 し上げ、お力をお借りしたいと願っております」

と丁寧な説明をした。

しょうかな」 人事ではございますまいがご機嫌伺いを兼ねて近々お顔を拝見させていただきま 「特効薬はないのかもしれませぬが、その田沼さまのお屋敷も被災された由、 他

春貞が言うと、

「ぜひ春貞どのからお口添えいただけると助か ります。

材木は適正価格により速やかな流通こそが江戸の町を再び活気あるものにするに

違いございませんからな」

南町奉行牧野成賢はそう言い切った。

早々に奉行所を後にした春貞らだったが、

「旦那、次はどこを回りますかな」

赤樫の棒を左手に持った留吉が問うた。

「そうよなあ、近くまで来たんだ。

で、留吉。八丁堀河岸に舟を回してくれ」

これまた久しぶりだが深雪さんの顔でも見ていこうじゃあねえか、

なあ…。

「がってんでさあ」

春貞と留吉の掛け合いを笑顔で聞きながら、

「深雪さまも娘歌代さまにご養子を得てお忙しいようですね」

と静香が言うと、

亡くなり、深雪さんも一時は己の命でも絶つのではないかと心配したがな、 養子を迎えてな、常廻り同心のお役目を継がせることができたので気が張ってい 「伊丹家も承知のように八重さんが六年前か…に亡くなり鉄太郎さんが一昨年に 娘に

春貞は土手に並ぶ柳の葉の揺れを楽しみながら呟くと、

るようだから何よりだぜ」

「しかし…それには旦那が随分と奉行所などにお働きかけいたしましたからな

す

留吉が思い出すように言った。

「留吉。それは口に出してはならぬぞ」

春貞が言い切り、留吉がペロッと舌を出した。

伊丹鉄太郎亡き後、春貞の支援もあり、 男助三郎を娘歌代の養子として縁組し、助三郎は伊丹助三郎として家禄を継ぐこ 同じ与力町組屋敷に住む斉藤辰之進の三

筝負うが尹子の屋敦を方てると深雪が繁喜とが許されたのだった。

春貞らが伊丹の屋敷を訪れると深雪が驚喜した。 「これはこれは嬉しゅうございます春貞さま。そして留吉さま、

どうぞどうぞ相変わらずですがお上がりになってくださいまし」

深雪はこの年、 腰はなんとか自分で立ち振る舞えるようになっていた。 、七十四歳になっていたしその眼は相変わらず極端に悪かったが足

「これ、歌代。春貞さまがお出でくださいましたよ_

「いいにいいない。深雪が声を上げると娘の歌代が姿を見せ、

「おいでなさいませ」

静香さま。

と座してから丁寧に頭を下げた。

「嗚呼、歌代さんを見ていると鉄太郎さんを思い出すぜ。

目鼻立ち、特に眼が父上そっくりだからなあ」

春貞が声を上げると歌代が恥ずかしがって赤くなり奥に引っ込んだ。

「深雪さん。なにかご不自由なことはねえかな」

春貞が問うと、

「お陰様で視力以外は何不自由なく暮らさせていただいております」

深雪が頭を下げると早々と歌代が茶を運んで来た。

「ありがとうよ。いただこう…」

早速湯飲みに手を伸ばしながら春貞は、

「実の娘が一緒であれば言うこたあねえだろうが、もしなにかあったら遠慮なく

言ってくれ。伊丹さんと俺との仲だ…」

春貞が破顔した。

れましたし八重さんも親身になってくれました。 「ありがとうございます。そもそもが春貞さまのご支援で鉄太郎さんと一緒にな

また娘と助三郎も優しくしてくれます。

わたしは幸せな女でございます」

と深雪が涙ぐんだ。

「いや、それなら俺も嬉しい。

草場の影で鉄太郎さんは勿論、幸江も八重さんも喜んでいようぜ」

春貞がいうと泣き虫の留吉が鼻を啜った。

「春貞さまご自身もお一人の身でなにかとご不自由ではございませぬか」

茶菓子を勧めながら深雪が問うた。

「いや、爺一人どうということもありません。

この静香や留吉がよくやってくれますし、我が屋敷には昔ほどではないにせよ人

静香、あれを…」

手もありますのでな。

春貞が命じると静香が手にしていた包みを渡した。

番頭だった富吉さんが幸い御店を盛り上げていてな、これは京都本店から送って 「深雪さん。これは夏穂の実家…といっても長兵衛さん夫婦は亡くなったが、大

きたという菓子のお裾分けだ。 土産代わりに置かしていただくので召し上がってくれ」

春貞はそういいつつ腰を上げ、

「深雪さん、歌代さん。また屋敷に遊びに来てくれ」

笑顔を向けて屋敷を後にしたが、深雪と歌代はその背に深々と頭を下げた。

「春貞さま。お疲れではございませぬか」

静香が心配顔でいうと、

「おいおい、そう年寄り扱いせんでくれ静香。

いや、立派な年寄りだったな…。

しかし幸い若い時に剣術で鍛えたからか足腰はまずまずだから大丈夫だ…」

春貞は続けて、

「ここまで来たんだ。 静香、 留吉、 ちょいと日本橋元鳥越まで付き合ってくれ」

と腰を伸ばした。

「旦那。日本橋元鳥越というと太子堂ですかえ」

留吉が言うと、

「そうだ。ちょいと願い事があってな。

我が家の仏壇はこの十年位牌がずらりと並び些か狭くなった。

ここいらで新調しようかと思ってな」

春貞は羽織の襟を直しながら呟くと静香が、

「僭越ですが春貞さま。そうしたことなら夏穂さまに願えばよろしいのではござ

いませぬか」

と顔を向けた。

番頭だった富吉さんが立派にお店を張っているが、夏穂にしても願いづらいと思 「うむ。そうなのだが、承知のように実父の長兵衛さんがいるわけではねえ。大

ってな」

「さようでございましたか」

堂の一郭が見えるところまで来ると前方に壮年の商人と思われる男と十二、三歳 そんな話しをしながら三人が大火の跡が多々残る日本橋を歩き、普請が続く太子 女の子が三人の浪人らしき侍に囲まれているのに出くわした。

「そこをおどきくださいませ。我らは何もしておりません」

商人が頭を下げたその胸ぐらを一人が掴み、

「お前の子供が俺の足を踏んだんだ。子供の落とし前は親がつけるのが筋っても

んだろう」

酒代でも奪おうというのか、 男たちは執拗に二人をいたぶっている。

春貞が動こうとした刹那静香が、

「そこまでです。武士ならそんなみっともない恐喝などおやめなされ」

と凜として声を上げた。

振り向いた一人が、

「この女、余計な口出しをするでない。 でないと痛い目を見る」

脅かしのつもりか鯉口を切った。

刹那静香が反動も無くふっと浮き上がったと思ったら男の顔を蹴り上げ、男はも

んどり打って地べたに気絶した。 「この女、洒落たまねを…」

と抜刀した男二人の額にこれまた静香が放った鉄片が突き刺さりあっと言う間に

その場に崩れ落ちた。

「お怪我はございませんか」

小袖の裾を直しながら静香が商人に問いかけると、

ありがとうございます。

どこのどなた様かは存じあげませぬが、 助かりましてございます」

少女と共に商人が頭を下げた瞬間、 春貞はふっと目眩を覚えた。

どこかで覚えのある景色だった・・・。

「商人と女の子供…そして小紋を着た女が止めに入る…」

浪人者に因縁を連れられているところに出くわし、まだ結婚前だったが幸江が抜 嗚呼、それは享保八年(一七二三年)暮れ、太子堂の主人長兵衛と一人娘夏穂 が

刀術の遣い手を一刀のもとに倒したのだった。

それが長兵衛と夏穂と出会ったきっかけであった。

すでに五十年ほども前の出来事だった。

「は、春貞さま。いかがされました」

旦那。 しっかりしてくれ」

静香と留吉の声が遠ざかり、春貞は意識を失った。

どのくらいの時が経ったのか、春貞が気がつくと太子堂の奥座敷に寝かされてい

枕元には静香と留吉そして井之上新界の顔があり、反対側には太子堂主人の富吉 が心配そうに見つめていた。

「気がつかれましたな」

新界がほっとした表情で声をかけた。

「俺は、俺はどうしたんだ。気を失ったのか…」

上半身を起こそうとすると静香がそっと身体を支えた。

「大したことではございませぬ。

新界が春貞の腕を取り、脈を測りながら答えた。少々お疲れだったのではございませぬか」

留吉も安心したのか減らず口を叩いた。 「だ、旦那も若くはないんですから無理をされてはいけませんぜ」

「井之上先生。 わざわざ駆けつけてくださったのか」

春貞が床に横になりながらすまそうに言うと、

「当然です。わたしは春貞さまの主治医でございますからな。

それはそうと、いかがされましたか…」

と破顔した。

「いや、こんなことは初めてだし直前までどこも具合は悪くなかったが、静香が

無頼漢を懲らしめている姿を見ていてな…」

「どこかで同じことがあったようだ…と気づいたのだ」

「ございましたので」

「うむ。そろそろ五十年ほど前の事になるが、商家の男と可愛らしい女子が浪人

者二人に言いがかりをつけられているところに俺と幸江が出くわしたのだ」

「ほう。それで一暴れされましたのか」

井之上新界はさすがに医者であり、患者というか相対した者から話しを聞き出す

のが巧みだった。

「暴れたわけではないが幸江がな、 抜刀術の相手を一刀のもとに倒したのよ」

春貞が遠くを見つめるように呟いた。

「さすがでございますな」

「その商家の男が太子堂の長兵衛さんでな、 娘が夏穂だった…」

「それがご縁でございましたか」

「うむ。そのことを思い出した瞬間にふっと力が抜けた。

春貞の顔には笑みが浮かんでいた。

もしかしたら、幸江が迎えに来たのかも知れぬ…」

「だ、旦那。例え奥様だとしてもまだお迎えは早うございますぜ。

留吉も精一杯の励ましを呟いた。

静香さんとあっしとでお戻りいただきましたからもう大丈夫ですぜ」

「そうか。しかしあのまま黄泉の国へ行けるのならそれも良いと思ったぜ。

春貞が俯きながら言った。 しろ心地よかった…」

静香と留吉は倒れた春貞をすぐ先の太子堂に担ぎ込み、太子堂の主人富吉は春貞 に心服していたから即手代を屋敷に走らせ、井之上新界を呼び寄せたのだった。

屋のような建物だった。

「富吉さん、世話を掛けた。

そうそう、伺ったのは我が屋敷の仏壇が狭くなってな、一回り大きなものを願い たいのじゃが、そこに早速俺の位牌が並んでは洒落にならぬな」

やっと春貞らしい物言いになった。

「何をおっしゃいますやら…。

ともあれおやすい御用でございます。 特にご注文がなければ手前どもで良きもの

を見繕うてご覧に入れます」

富吉が畳に両手を突いて頭を下げた。

春貞は歩いて帰れると言ったが、念のためと太子堂が呼んでくれた駕籠で店を出

新界がため息と共に呟いた。「こうして町中を見てもまだ酷い状態ですな」

留吉が応じつつ、和気藹々に大川の舟を繋いである場所に向かって進んでいた一 行だが急に駕籠かきの足が止まった。 「あれだけの大火でしたから一年やそこいらでは元にもどれませんや」

- 93 / 195 -

周 りはすでに夕闇が迫っていたが春貞も駕籠から顔を覗かせ、

「物盗りかい。

まったくこれでは町の衆も安心して歩けねえではないか」

と声を上げた。

どうやら駕籠一丁を井之上新界、留吉、静香が守るように取り囲んでいるのを見

て大層な分限者でも乗せているとでも思ったのか。

「それぞれ懐の物を素直に置いてけ。であれば命までは取らん…」

酒で喉を潰したような声で一人が怒鳴った。

見れば十人近くの二本差しが取り囲んでいるようだった。

「旦那、どうします」

留吉が落ち着き払った声で駕籠の春貞に問うた。

「そうよなあ。やはり俺はゆっくり駕籠に乗っている身分ではなさそうだ。

春貞が言うと新界は、

どれ、外に出て面でも見せてやるか…」

「大丈夫でございますか」

と心配した。

井之上新界とて忙しい診療の合間に春江館で柔術の稽古を続けていたし留吉はす でに棒術の大家と言っても良い腕前だったから、二本差しの二人や三人がかかっ てきてもどうということもなかった。だから平然としていた。

しかしそれが物盗りたちの神経を逆撫でしたようだ。

「柔な物言いで済ませてやろうと思ったが、どうやら命が欲しくない者ばかりの

た。

ようだ」

抜刀した者たちが囲いの輪を一段と狭めたそのとき春貞が気配も無く一歩前 に出

刹那ヒュンヒュンと風を切る音がし「チーン」と鍔鳴りしたと思ったら春貞の前

面に居た三人の髷がすっ飛んでいた。

「うわあああ」

頭を抱えた者が腰砕けになったとき留吉の六尺棒が唸り二人が鬢を叩か 新界に腕を決められた頭目と思われる男が空を舞って地べたに叩きつけられ れ気絶

「に、逃げろ。化物だ」

あっというまに六人が戦闘不能になったのを眼前にして残りの四人は

- 95 / 195 -

と声を上げながら闇に散っていった。

「失礼千万でございますね。我らを化物とは」

出番がなく懐手をしたままの静香が呟くと春貞が声を立てて笑った。

たから、奴らからしたら天狗様かなにかの仕業に思えたのではございますまい 「しかし春貞さまの太刀筋は相変わらず凄くて私の目にはやはり見えませんでし

7

井之上新界も苦笑いし、

「ともあれ春貞さま。先ほどはそれこそ天狗ならぬ鬼の霍乱だったのではござい

と言い切った。

まだまだ暑い日が続く明和九年九月、 長崎組が相変わらず頭を突き合わせている

とき留吉が、

「失礼いたします。

先生方、平賀源内というお方がお見えなのですが、お通ししてよろしいのでしょ

うかな」

と顔を出した。

「ほう。源内どのが長崎から戻ったか…。

留吉どの、お手数をおかけするがこちらへお通ししてくだされ」

前野良沢が願った。

暫くすると目の覚めるような藍色の羽織を手にし、手拭いで汗を拭きながら源内

が入ってきた。

「ご一同暫くです。一昨日長崎から戻りましたが、いやはやお江戸も暑いです

な

で、相変わらず阿蘭陀語の読み分けかえ…」

と言いながらどかっとその場に座した。

「いかがでした長崎は」

杉田玄白が問うと、

やあ。本当の所、何をしなければならねえという長崎行きではなかったが、

行けばいろいろと飯の種はできるものよ、玄白さん」

源内は機嫌良く言い、

「すでにお聞きと思うが、 長崎では良沢さんや新一郎さんと数ヶ月一 緒だったが

そう言いながら源内はその後が長かったぜ」

そう言いながら源内は広げられている「タートル・アナトミア」の翻訳資料を認

「ほう、こりゃあていへんな仕事だ」

と声を上げた。

「源内どの。いまどのようなことをやられているのですか」

井之上新一郎が興味を持って尋ねると、

いカラクリを見つけて持って帰ったんだが、これが完全なものではなくどこか具 「ふむ。井之上さんたちには長崎で言ったと思うが、今般エレキテルという面白

合が悪いんだ。

体を腑分けして人の仕組みを知ろうとなさってる。 早いとこ、皆に見せられるよう工夫したいのだが、言ってみればご一同は人の身

方俺の方はいわばカラクリの腑分けってところかな」

と笑った。

「なるほど。それは言い得て妙ですな。

それはともかく江戸ではゆっくりできるんですか」

玄白が聞くと、

「それよ。田沼さまの願いを受けてな、また鉱山回りをしなくてはならねえ。

江戸では尻を落ち着けることはできそうもねえな」

平賀源内は腕を組み首をぐるぐると回しながら言った。

舞われ、特に後始末もそして生活もままならない下町は再び大混乱となった。 江戸の町は急ぎ大火からの復興をめざしていたが、八月になると大型の台風に見

「春貞さま。 いま米道さまをはじめ留吉さん道之助さんらが土嚢の準備を始めて

いますが間に合いますかどうか…」

静香かが居間にいた春貞に心配そうに報告にきた。

「そうか。 昔のようにこの屋敷も些か男手が少なくなったからこういうときは大

変だな。

飲 、み水のくみ置きなどは済んだか」

春貞が問うと、

「はい。特に診療所の方々が中心になって飲み水をできるだけ確保するようお働

きでございます。

それに夏穂さまや奈美さんまで土嚢を運んでいらっしゃいます」

静香が申し訳なさそうに呟くと、

「そうか。それは苦労をかけているが、後心配な点はないか」

春貞が風と雨が強まってきた庭を睨みながら聞いた。

ので大丈夫かと思います」 「これから私が屋根の点検と補強を試みますが、すでに雨戸などは固定しました

静香がやはり暗くなってきた庭を見つめた。

「分かった。静香、お前さんの技を疑うわけではねえが、 昔ほど若くはねえ。十

分に注意をしてくれよな」

春貞が笑顔を送ると畳に両手を突いた静香が美しい笑顔を返して音もなく居間か

ら姿を消した。

春貞が居間から玄関に出てみると、 雨風の中に井之上新界、 新一郎、 吉之助、

道

之助が土嚢運びを手伝っている姿があった。

た麻袋の積 な日にも集まっていた杉田玄白、前野良沢、 踵を返した春貞が二棟の蔵へと目をやると、 み替え の手伝 いをやってい た。 米道格左衛門と留吉そして何とこん 中川淳庵 が蔵の備蓄米と甘藷が入っ

春貞 の視線に気がついたか、 杉田玄白が母屋に視線を向けると春貞は丁寧に頭を

下げ、玄白を慌てさせた。

は政の頂点に 屋敷は目立 つ被害はなかったが相変わらず下町 いる田 沼意次に向 けられるようになる…。 の被害は甚大であ Ď, 庶民 0

この年、 明和 九年十一月十六日、 改元があり明和が安永と変わった。

桃園 天皇即位 <u>つ</u> ためもあったが、 火事風水害が続いて起こったこの年、 明和 九年

の語 呂合わ せが 「迷惑年」 によるとされたためもあるという。

長崎組の苦闘は続いていた…。

その日も杉田玄白、前野良沢、 中川淳庵はもとより石川玄常、烏山松圓、 桐

すでに同好の士も増えてきたがさすがに良沢の屋敷では狭くなったことでもあ 嶺春泰らが春貞の屋敷の一室に集まって頭を突き合わせていた。 春貞の屋敷の一室を借り続けていた。

「この、鼻のところですがな。フルヘッヘンドしているものだというのはどのよ

うな意味なのか…」

良沢が腕組みして呻った。

「さて、なにか取っかかりはありませんかな」

と玄白

山正

とはいえ一向に意味は分からなかった。

そのとき井之上新界と新一郎が現れた。

「ご一同、いかがですかな」

と笑顔で座した新界が懐から一冊の小雑誌を取り出

「お役にたつかもしれないと昔長崎で買い求めた辞典まがいのものを探して持参

しました。

息子が少しはお役にたつのではないかというでな、 宜しければお使い下さい」

と良沢の前に置いた。

「おお、それは有り難い。早速拝見させて下され」

前野良沢はつかみ取るように小雑誌を手に取り、

「嗚呼ありましたぞ。フルヘッヘンドの項が」

と叫んだ。

「それは吉報」

「どんな解説でしょうかな」

皆興味津々で良沢の次の言葉を待った。

「良沢どの。いかに…」

問われた良沢は、

た庭を掃除すれば、その塵土が集まってフルヘッヘンドする…。 「このまま読み解けば、木の枝を切り取ればその跡がフルヘッヘンドをなし、 ま

さて、どういう意味になりますやら」

と頭を抱えた。

湯飲みに手を伸ば した杉田玄白が疲れた表情を庭に向けると、そこで留吉が

せと竹箒を使い掃き掃除をしていた。

後でまとめて焼却するのだろうか、あちらこちらに落葉や小枝が小さな山を作っ

ていた。

「あつ、ご一同。

木の枝を切った跡に切り口が次第に盛り上がりますな。また庭掃除をして塵や土

を一箇所に集めれば堆くなる…。

ドとは 鼻は顔の真ん中にあって、 (堆し) と読めば意味が通じませぬか」 堆くなっているものであるから…つまりフルヘッヘン

玄白が叫ぶように言い放った。

「杉田さん、いかにももっともだ。 フルヘッヘンドを(堆し)と訳せばぴったり

ですな」

前野良沢も膝を叩いた。

同も歓喜の声を上げた。

「今日の成果はフルヘッヘンドだけですな」

中川淳庵が辛そうにいうと若い桂川甫周は

「いや中川さん。『為すべきことは、もとより人にあり、成るべきは天にあり』

というではありませぬか。

このまま努力すれば、きっと日の目を見るに違いありませんぞ」

と言い切った。

そのとき襖の影から、

「失礼いたします。

先生方、茶をお待ちいたしましたので一休みされてください」

とお文が声をかけた。

「これはこれはいつも申し訳ないことでございます」

杉田玄白が襖を開けてお文から盆を受け取った。

お文は、

「井之上先生。およし先生が診療所にお戻りいただきたいとのことでございま

ا ا

と続けて伝言を伝えた。

「そうか。ご一同と一緒に居ると時間を忘れて困る。「終り、任言で任えて

ではわたしたちは診療所に戻らねばなりませんのでこれで失礼しますがごゆ

り ::

井之上新界は一子新一郎に目配せして座を立った。

同時に前野良沢が、

「ご一同。それがし今日は藩侯に呼ばれておりますので申し訳ありませんが一足

先に失礼いたしますぞ」

と頭を下げて退出した。

それと入れ違いに春貞が顔を出した。

「いかがでございますか。捗りましたかな」

笑顔で一同の前に座した。

「お陰様にて場所だけでなく食事まで都合いただいておりますので助かってお ŋ

ます」

杉田玄白があらためて春貞に頭を下げた。

船先生の使い走りをしていたこともございましてな、医療のことには関心がある 「いやいや。 俺…それがしも若い頃、小石川養生所開所にあたり、 肝煎 の小川笙

のです。

そもそもそれがしが胸と首を斬られたのを笙船先生に助けていただいたのがご縁

でしてな。

多少なりともお役に立てればその笙船先生も草葉の陰でお喜びでござろう」 春貞は首巻きの上から古傷を押さえるようにしながら話した。

「そうそう、杉田先生。

阿蘭陀の書物の読み分けも進んでいると伺いましたが、 同好の者がこれだけ集ま

り、時を過ごせば思わぬ金もかかりましょうぞ。

また井之上先生からも聞きましたが、まずは全訳を出版なさる前に、 いましたな…約図を出版されるおつもりとか」 なんとか言

春貞がそう問うと、

ともないのであれば意味がございません。 り世に問うてもこれまでなかった事でもあり驚き怪しみ、 「は 我らの仕事は少しずつ知られてきたようでございますが、 異端の書と手に取るこ 訳書をい きな

約図 はまあ、 ある種 の報帖のようなものと考えておるのですが…」

が中川淳庵、 桂川甫周らと頷き合いつつ言った。

なお報帖とは今で言うところのちらし広告といった意味だ。

記述されているからと、お咎めがあり絶版となりました。 「また後藤梨春というお方が出版された『紅毛談』という書物は中に阿蘭陀語が

我らの出版もそうしたことのないよう十分に配慮しながらことを進めたいと思っ

ています」

中川淳庵がそう言い切った。

き取ったというオランダの地理・風習・言語・ 産物 に筆述したもので若干の挿絵を含む上下巻本である。 「紅毛談」とは明和二年に後藤梨春という本草家が江戸参府のオランダ人より聞 ・器具・ 医薬などを談話体

上巻にはオランダの地理その他を記した後、 オランダ文字とその読み方を載

(Elektriciteit 電気) に関する事を摩擦式発電機の図を付して説明しており、 下巻ではオランダの産物や器具・医薬などと共に「エレキテリセイリティ」 日本

最初の電気に関する文献ともいわれている。

ちなみに平賀源内もこれを読み、エレキテルの存在を知ったらしい。 「なるほど。この爺も必要とあらばお上に多少物申すこともできましょう。 お役

春貞はそういいながら懐から袱紗に包まれた包金四つを玄白の前に差しだした。 にたつかどうかはともかく、お困りのことがあれば申されてくだされ」

百両の小判であった。

「な、なんでございますかな春貞さま」

玄白が怪訝な顔をした。

の出版とかにも些か金もかかると存じささやかなれどお役に立てていただきたい 「井之上先生の願いもありましてな。失礼ながらご一同のお働きには…そう、そ

と思いましてな。

まあ金はいくらあっても邪魔にはなりませんでしょう。

遠慮のう収めてくだされ」

春貞が笑顔でいうと杉田玄白ががばっと平伏し、

「あ、ありがとうございます。

前野さんらとも相談し有益に使わせていただきとうございます」 我ら志だけは高いつもりですが、思うようにならぬものもございます。

中川淳庵と桂川甫周も慌てて頭を下げた。

ととかく人というものは対立するものよ。 か。それはお主たちの仕事が世に認められつつあることなのだろうが、そうなる 「ところで、これまた井之上先生から聞いたことだが、同士の人数も増えたと

そうした問題は起きていないのかえ」

「おっしゃることはよく分かります。

茶を飲みながら春貞が磊落に問うた。

この仕事は…ご本人がいないので遠慮無く申せますが、 前野良沢どのがいなけれ

ば到底仕上げることはできません。

その良沢どのにしてそれがしと志は同じくタートル ることは間違いございませんがその志の目的が違います」 ・アナトミアの読み分けであ

玄白が続けた。

したいということのみ。 「それがしはただひたすらこの訳本を世に問い、 蘭方というか医療の進歩に貢献

しかし良沢どのはタートル・アナトミアの読み分けを契機にして阿蘭陀語を完全

にご自分のものとしてあらゆる阿蘭陀本を読破したいというのが最終目的のよう でございます。したがいまして阿蘭陀語の字引を作りながら読み分けをするとい

う時間がかかることをやられています」

これまた湯飲みに手を伸ばしながら玄白は、

「春貞さま。それに当然ではありますがそれぞれ性格が違います。

それがしはもともと大ざっぱな性格でせっかち…。 それに、世に初めてのことを最初から完全無欠に仕上げるなどということは

もと人間業ではなく無理と考えております。

とにかく大方のところで世に問えば次の世代が間違いを正し、次第に完全なもの

にしてくれるでしょう。

それがしはそう考えておりますが、良沢どのは完全主義者。最良最善の形で世に

問いたいとお考えのようでございます」

杉田玄白は綺麗にそり上げた頭を撫でながら春貞に思いをぶつけた。

同じ頃、春江館では久しぶりに緊迫した稽古が続いていた。

道場の直弟子は江戸の各藩から送り込まれた七十余名の者たちが日々通っていた

が、それらの者と混じり、お蘭の姿が目立った。

見所には館長の米道格左衛門が木刀を持って座し、 師範の夏穂が一人一人に対し

て的確で具体的な指示を与えていた。

しばらくすると道場に春貞が姿を見せた。

「ないものねだりをしても仕方がないが春さん。

こういう時こそ堀田さんや横手さんがいてほしかったですな」

と声をかけた。

「そうよなあ。しかし人はあっけなく死ぬものだとつくづく思ったぜ。

まあ、格左と夏穂が元気でいてくれる。それで由としねえと罰が当たるかもな」

春貞が応じ続けて、

「格左。誰かよき人物がいれば良いがなあ」

と答えた。

「さようですな。しかしこの泰平の世に腕の立つ者は少ないだけで無く、 春江館 首巻き春貞15_決定版_新表紙.hagoromo

些か白髪交じりの無精髭が伸びた顎を撫でながら格左衛門も呟いた。 0 師 範となれば誰 でも良いという訳には いきません からなあ」

安永二年(一七七三年)正月が明けた。

タートル・アナトミアの読み分けも要領が分かってきただけに効率が上がり目処

が付いたので杉田玄白は昨年来温 めていた約図を出版した。

の名は前野良沢の了解をとり 「解体新書」と名付けることにしたこともあっ

て約図は「解体約図」と名付けた。

という前例のない書物であり、世に受け入れられない危惧があった。そのため 「解体新書」の一部を抜き出したダイジェスト版といった意味で世の理解を得よ 解体約図」 は先に玄白が言ったように阿蘭陀語からの読み分け、 すなわち翻 訳

うとしたのだった。

さらに 「解体新書」 の出版が幕府の禁忌に触れないかどうかを確 か める目 的

しかし残念な事にこの「解体約図」の出版に前野良沢は積極的でなかった。

一方、春貞の屋敷は久々に賑やかだった。

特に井之上新一郎と入れ替えに長崎に留学し吉雄耕牛の門を叩いた留吉と奈美の の歌代、そして婿の助三郎も顔を見せていた。 一子吉太郎が二年ぶりに戻ってきたこともあるが、亡き伊丹鉄太郎の妻深雪と娘

舅のお勢も手伝い さらに金森水道町の岡っ引き金次と女房のお佳そして、今年米寿を迎えたという がてら元気な立ち振る舞いをしていた。

岡っ引きといえば須田町の岩次郎は足が弱ったために駕籠でかけつけたが、

の三郎と妻の里がぴたりと寄り添っていた。

また商人たちは、 三郎もい まではいっぱしの十手持ちとして務めに精を出していた。 夏穂の実家である仏壇仏具店の大店の現主人富吉、 両替商相模

屋の二代目清右衛門、 薬種問屋蓬莱屋の主人、 なみがいた。

なみは隠居活太郎の孫娘であり、 春江館の女弟子だったがいまでは女主人として

御店を盛り上げていた。

「こうしてお顔を眺めると、時が流れたことを思い知りますな」

米道格左衛門が盃を手にして赤い顔で言うと、

「さようですな。春貞さまとご縁ができてから早くも五十年が過ぎましたからな

Č

今年で七十二歳になるという太子堂主人富吉が呟いた。

「そうですね。五十年前のあたしはまだぴちぴちしておりましたよ。

ねえ春さん」

古い付き合いのお勢が剽軽にいうと、

「違えねえ。お勢さん。

捕り方の若いもんは皆お勢さんの気っ風に惚れていたからなあ」

と春貞が持ち上げると、

「春さん、あまり年寄りをいい気にさせないでおくんなさいよ」

娘のお佳も遠慮の無い物言いをした。

「そういえばだ、『春さん』と呼んでくれるお人は少なくなりましたな」

格左衛門がふと呟くと、

「それよ。 ζ **)** までは格左 の他はお勢さんとお佳さん、 そして金次親分くらいなも

三言見分、女は厚いこと言言に言うつうと言のだからな。

定吉親分、政五郎そして笙船先生…皆あっちへ行ってしまったからなあ」

春貞の寂しそうな表情が気になったの か、 お蘭 が

「爺さま。 わたしがこれから『春さん』とお呼びしましょうか」

と縋りついたので一同が笑い、春貞が照れた。

て新一郎、吉太郎は春貞の許しを得てこの集まりの中に居た。 ている者たちが新年早々、白熱した議論を行っていた。 同時に診療所の隣にある井之上新界とおよしの屋敷では長崎組と自ら好んで称し 無論新界とおよし、そし

皆いささか酒も入っていたので遠慮の無い物言いになっていく。

杉田玄白が責めるように言い放った。 た仕儀になりましたが、本編 したが、どうしても名を入れてくれるなと仰りお譲りにならなか 「前野良沢というお人の名は一番に入らなければならないはずの 0 『解体新書』も同じと申されますか、良沢どの」 った 『解体約図』で のでこうし

出版がなった「解体約図」 には著者の名として杉田玄白と中川淳庵の名しかな

く、前野良沢の名はなかった。

「そうですよ。前野さんのお力がなければこの仕事は成し遂げられなかったと皆

がそう思っています。

なのに何故頑なにお断りになるのですか」

淳庵も酒の力を借りてか、迫った。

「名を売るために読み分けをやってきたわけではない…」

良沢がぼそっと言い切った。

「なに…。それでは我らは名を売りたいが為にと申されますか」

石川玄常が息巻いた。

玄常は江戸の生まれで十四歳のとき、 き京都へ遊学して名医と交わる。その後、杉田玄白、前野良沢らが蘭学を興した 官医熊谷無術に医学を学び、二十八歳 のと

ことを聞いて江戸に帰り「解体新書」校合のころ頃から参加した。

ちなみに校合とは二種以上の写本・刊本などを比べ合わせて本文の異同を確かめ

たり誤りを正したりする作業である。

「まあまあ…ご一同、 冷静になりなされ」

井之上新界が一同を諫めた。

いものは、どこの誰が書いたのかが不明では手に 「しかし良沢どの。著作物は皆そうですが、特に 取ってくれるお方はいません。 『解体新書』のような前例のな

著者の名は中身を保証する大切な役目を負っているのです」

中川淳庵は穏やかに言う。

「それならば、玄白どののお名があれば十分」

前野良沢は静かに盃を仰ぎながら呟いた。

「またそれを申されますか、先生」

「まさか、万一お上からのお咎めがあるかも知れぬとお考えではございますまい

な

嶺春泰と石川玄常が声を上げると、

「ぶ、無礼 な

良沢の眉が上がった。

領春泰は上野国高崎藩 の藩医の家に生まれ、 宝暦十二年(一七六二年)に藩主松

平輝 高 の命令によって江戸詰を命じられた。そして前野良沢に師事し 「解体新

書」の翻訳にも参加していた。

「またまた、ご一同行きすぎですぞ」

井之上新界が割って入った。

「それがし手水に…」

前野良沢が気持ちを落ち着けようとしたか、座を立った。

「しかし、前野先生は天才ですが頑固者で変わり者です」

と良沢の姿が見えなくなると石川玄常が困り顔で呟いた。

「確かに。頑固であることはご本人もお認めになってますが、だからこそこの難

事業に正面から向うことができたのです」

玄白が言うと淳庵が、

し阿蘭陀語研究に夢中になりすぎ、本来のお役目である藩医の勤務を怠ることが 「変わり者と言えば最近もれ聞いた話しですが、中津藩江戸屋敷で前野どのに対

あると同僚から怠慢を訴えられたそうです」

「ほう。それで…」

「しかし藩主奥平昌沢様は 『日々の治療も大切だが、その治療のため天下後世の だけませぬか」

とのこと。 民に有益なことを成そうとすることも立派な仕事である』と良沢どのを支援した

藩主様ご公認の変わり者だともっぱらの評判とか…」

そのとき足音がして前野良沢が入ってきた。

「良沢どの」

玄白があらためて呼び掛けた。

「はい」

のです。したがって良沢どののお許しがなければ出版することはできませぬ。 「くどいようですが貴方がいたからこそ『解体新書』の読み分けに目処がつい た

しかし…」

「しかし…」

非一日も早く世に問うことが我らの役目でもあると思し召して出版をお許しいた そして貴方もそれがしも些か病弱の気ありて、いつまで元気でいられる いものがございます。したがって完全無欠の出来であるとは申せませぬが是非是 「良沢どの。それがしも早四十歳。失礼ながら貴方も齢五十。 か 心許な

杉田玄白は両手を膝に置き頭を下げた。

良沢はしばらく無言でいたが、

「そうまで言われるならそれがしも各々方の熱意に水を差すつもりはござらん。

思うようになされるがよろしかろうと思います。

これよりすべてを玄白どのにお任せいたそう…。

前田良沢は杉田玄白に身体を向けて頭を下げた。ただ、それがしの名は出してくださいますな」

玄白は井之上新界に、

「井之上先生、何とかおっしゃっていただけませぬか」

と助けを求めた。

腕を組んだ新界は、

「年の功で物申しますがな。ここまで良沢どののご意志が固いとなればそれはそ

れで尊重申し上げるべきことでしょう。

良沢どのには今後もお力添えをいただきつつ、玄白どのらは出版に向けてご準備

なさいませ」

と言い切った。

前野良沢は無言で頷いている。

新界は続けて、

り得ていることです。時が経ち、 「『解体新書』の読み分けに良沢どののお力大であったことはここに座す皆が知 縁があればそのことを世が知るときも来られま

と破顔した。

なぜなら前野良沢は「解体新書」の原稿を玄白に渡した後はそれに拘らず、 からだ。であるなら良沢の家に押しかけるわけにもいかなくなったのだ。 の読み分けを進めるという理由でこれまでのように集まりに顔を出さなくなった その後の長崎組 の集まりはすべて春貞の屋敷で行われるようになった。 独自

_

新玉 の五日、 夕闇迫る時刻、 屋敷の門前がにわ かに人馬の喧噪に満たされた。

ちょうど掃き掃除をしていたお輝が慌てて母屋に駆けてきた。

玄関に顔を見せた米道格左衛門に、

「く、公方さまの御成でございます」

と咳き込んだ。

「な、何…。家治さまがか。

それは大変だ」

格左衛門が居間にいた春貞に知らせに走った。

しばらくの後、 客間の床の間を背に十代将軍徳川家治が座し、 手前脇には老中筆

頭田沼意次が笑顔で座っていた。

「これは上様。このような狭き場所で恐れ入ります」

春貞と格左衛門が平伏した。

してな、その帰りに上様が是非にも春貞どのの屋敷に立ち寄りたいとの仰せのた 「相変わらず急でご迷惑をおかけしますが、今日は御進献鶴御成の日でございま

め伺いました」

意次が家治の意を受けて言った。

「余にはやはり父、いや特に爺様の血が濃 ζ) 0 か、 爺様の好んだものや場所が心

地よいのじゃ。

春貞、 この屋敷には爺様がしばしば御成になったと聞いておる。

余はまだ三度目じゃがな、 確かに城内と違い肩の荷が下ろせる気がいたす」

家治が磊落に呟いた。

御進献鶴御成とは、天皇に進献する鶴を将軍がみずから捕りに出かけるという行

事で家治の実父九代将軍家重以降、 入寒後にオオタカでツルを捕ることが将軍家

の年中行事、慣わしになっていた。

このとき家治は三十六歳になっていた。

#香と秋子が平伏し「失礼いたします」

静香と秋子が平伏し茶と菓子を乗せた盆を運んで来た。

「これは恐縮」

意次が自ら受け取り、 家治の前に置くと家治は破顔し躊躇なく茶器に手を伸ば

t=

「上様。鷹狩りの成果はいかがでございましたか」

春貞が問うと、

「うむ、今回は一羽であったが御進献鶴御成は鷹狩りの醍醐味を味わうというよ

り幕府の威信がかかった余の役目よ。

すことになるのでな、これでも神経を使うのじゃ」 城の外に出られるのは気持ちが良いが、万一まったく捕れないと鷹匠 の面目を潰

家治は機嫌良く答えた。

田沼意次が、

吉凶を占うこともいたしますので上様も大変でございます」 して捕れないと上様も鷹匠も面目が立ちませぬし、反対に一日で四羽捕 ったりすればそれはそれで困りごととなります。それに何羽捕れたかでその年の 「ご承知かと存じますが、ツルは一冬に四羽までとされております。 したがいま れ てしま

と真顔で続けた。

息入れた家治が盆に乗った京菓子を見つめ、

「春貞…」

「はい」

「この形をした菓子のことは爺さまが話してくれた記憶がある。

爺様はこの菓子はお好みだったか」

と問うた。

は爺様すなわち八代将軍吉宗を心から尊敬していたので吉宗が好んだあ

れを自分でも体験する事を好んだ。

「御意。吉宗さまは大層お好きでございましたな」

春貞がそう答えると家治はにっこりしながら京菓子に手を伸ば した。

そのとき、診療所から長崎組の数人が帰り支度をしながら出て来たが、彼らは客

をしながら三囲神社側の通路を通り、 間に将軍と田沼意次がいることを知らなかったから歩きながらも読み分けの話し 船着き場へと足を運んだ。

そのざわめきを耳にした家治は、

「いま、楽しそうな声が聞こえたが、 屋敷内でなにか集まりがあったか」

家治は興味津々の態で春貞に問うた。

「お耳汚しでございましたらお詫びいたします。

この二年ばかり、月に六・七回、診療所の居間などを使い蘭方医たちが集まって

春貞が言い終わる前に、いるのでございます…」

「おお。源内…平賀源内から聞いております。 例の阿蘭陀の医学書の読み分けを

しておるとな」

意次が家治に視線を送り頭を下げながら口を挟んだ。

家治も承知のことだと暗に示しているのを受けた春貞は、

がります。我が国の医学の進歩に大きな足跡を残すことになると不肖春貞も応援 「さよう。二年も三年も地道な作業をこつこつと進めている医師たちには頭が下

と話すと、

しておるところでございます」

「さようか。医術が進歩することに悪い懸念はひとつもないであろう。

意次…」

「はい」

「なんぞできることがあらば支援してやれ」

将軍家治が言い切った。

四

春になった…。

に そもそも毎年三月になるとカピタンは江戸で将軍に拝謁 たこともあり、 ちょうどその頃、 「 解 体 玄白 は 新書」の草稿はこれまで十度書き直し、 「ター 玄白は最終稿を耕牛に見てもらおうと準備をしていた。 トル 長崎 0 ・アナトミア」を読み分けしつつ漢文で綴ってい 阿蘭陀通詞吉雄耕牛がカピタンの江 なお手を加えてい 珍しい産物などを献 戸参府 に随 た。 たが

向き、 上するのが習 玄白は 原稿 前 に目を通してもらうと同時 野良沢と一緒にカピタン わしになっていたがこの頃に およぶ に疑問 び吉雄耕牛が宿泊している長崎屋に出 は五 の点を正 年に一度となって したい と願った。 77 た。

この様子は 、るが、 耕 「解体新書」序文を吉雄耕 半は 二人の業績に最大級 牛自 0 賛辞を送ってい 身が 書 47 てお る。 り、 その中で詳しく

我 数は数え切れな が国 の幕 蔚 が 呵 د يا 蘭 陀人の入国を許 かし学者は翻訳することはできなかったし、 てから数百年が経つ。 その間 に また通詞 出た学

文章が拙 かったのだ」 と言い切った。 そのため、 いまだかって筋道を立ててこの道を世に広めた者は ζ **)**

「解体新書」は二人の師匠でもある吉雄耕牛のお墨付きをもらったのだ。

桜がそろそろ散り始めた日、その日も杉田玄白、 中川淳庵そして桂川甫周らは診

療所に続く居間で「解体新書」の最終稿とにらめっこしていた。

「何ごとでございましょうか」

そのとき母屋がにわかに騒がしくなった。

淳庵が立ち上がって窓を開けると風がふわっと通り、 原稿の数枚が舞い上がっ

「こ、これは失礼」

窓を少し閉めながら見通せる限りに門前へ目をやると大勢の人馬が息づいてい

淳庵が唖然と口を開きながら呟くと、 「玄白どの。なにやら大名行列でも来られたようでございますな」

「なんですと。まさか大名行列が…」

なお、

松平友著は尾張藩第二代藩主徳川光友の十一男である。

と甫周も立ち上がった。

「ご一同。まずは窓を閉めてお座りくだされ。

原稿が動いてしまいますのでな。

それにここは松平春貞さまのお屋敷、 大名行列 のひとつやふたつ、 立ち寄られ

もわたしは驚きませぬぞ」

杉田玄白が茶目っ気たっぷりに言い切った。

実のところ、 人馬の列は参勤で江戸に入った尾張藩第九代藩主、 德 川· 宗睦 の行列

だった。

勝が宝暦十一年(一七六一年)亡き後に次男宗睦が藩主となったあとも宗睦は春 幼少時に尾張徳川家川田久保松平家に 貞をどこか己の爺様といった感覚で慕って 春貞の出生は尾張 蓈 したがって六代藩主徳川継友や七代藩 (後 の八代藩主宗勝) であり、 を弟のように可愛がって育った日くがあった。 第三代藩主徳川綱 預けられて育った際、 いた 主徳川宗春とは腹違いの兄弟であ 誠が のだ。 市井 の女に生ませた子であ 当主松平友著の子代 為 に宗

春貞に勧められるまま客間の上座に座した宗睦はこのとき四十一歳で働き盛り。

すでに名君と評判だった。

「春貞さま。参勤で今年は江戸詰のため立ち寄らせていただきましたがご健勝の

宗睦は相好を崩した。よし、安堵いたしましたぞ」

「ありがたいことでございます。

殿のおかげで尾張とのご縁も切れずに済んでおりますが、 それがしも歳。 なんの

春貞が頭を下げた。

お役にも立てずに心苦しいことでございます」

しとのことが明記されておりました。 の無きよう、そして尾張に困ったことが生じたら躊躇なく春貞さまにご相談すべ 「なんの。何度も申しますが父の遺言にはくれぐれも春貞さまに礼を失すること

事実父は春貞さまにお助けいただいた若き時代のことをいつも懐かしそうに話し

てくれました。

尾張にとって、 いや余にとっても春貞さまがご健勝でおられるだけで安堵できる

大きな存在でございますでな」

宗睦は静香が運んで来た茶に手を伸ばしながら破顔した。

「いや、すでに年寄りの出る幕はございませぬ

ます。それがしのように剣でしか己を律することができない者は役にたちますま 今日も向こうの診療所に隣接するところでは蘭学を志す若い者達が集まって お ŋ

\ L

春貞も茶器を両手で包み込みながら呟いた。

う学問所の明倫堂を次の世を担う若者たちのため再興すべきと命じたところで 「そのことです。春貞さまは特別なれど、それがしも寛延二年に創立されたとい

す。開講まではまだ数年かかるかも知れませぬ。

今度は藩士の子弟だけでなく、農民や町人にも儒学や国学を教えたいと願ってお

るのです」

宗睦は教育の重要性を認識していた。

天明二年(一七八二年)に宗睦は明倫堂を再興し、天明三年に開校。 細井

平洲が初代督学(校長)となった。

初期 の生徒数は五十名程度だったが、 後に五百名まで増加している。

なお、 そして愛知県立明和高等学校として現在に至っている。 十一月(一八六九年) 先走 るが 明治 時代初頭 に明倫堂を「学校」と改称し翌年明倫中学校として復活。 には各藩校でも教育改革の 動 きが始まり、 明治二年

宗睦は、

「これから春貞さまの屋敷に伺うと上様に申し上げた際、 『よろしゅうにな』と

そう言いながら腰を上げた。

羨ましそうに申されておりましたぞ」

「門前に大勢を待たしておりますので今日はこれで失礼いたしますが、 また寄ら

せていただきます」

德川御三家筆頭格、 尾張藩十代藩主徳川宗睦は颯爽と戻って行った。

れこそ患者や感染を心配する人たちで溢れ しかしこの安永二年の三月末から四月、江戸には疫病が大流行し向島診療所はそ てい た。

四人が医師として立ち振る舞い、 無論肝煎の井之上新界と妻のおよし、 きれないのは明らかだった。 お文とお輝親子が下働きとして奮闘したが対応 息子の新一郎と留吉・奈美の一子吉太郎

書」の読み合わせのために春貞の屋敷に通ってきたが、 に見かね、 その時期も一ヶ月に七日ほど杉田玄白や中川淳庵そして桂川 読み合わせを中断し診療所を手伝う日々が続いた。 玄白らは医者として見る 甫周らが 「解体 新

「そういえば、 我らも医者でしたな」

中川淳庵が冗談を言いつつ、お文から渡された白い作務衣に着替えていた。

「井之上さん、この疫病は一体何なのでしょうかな」

息ついたときに桂川甫周が伸びをしながら問うた。

「それです。どうにもわからんのですよ。

下痢を併発することが多いので文献を多々探ってみましたがわかりません。しか し単なる流行風邪ではないように思いますがな」

首を傾げる新界に、

「そうですな。感染力も高いし特に年寄りの死亡率が異常に高いですし…」

甫周は玄白と頷きあいながらも呟い た。

待つだけというのでは医者として辛いですな」 「何の病気かが分かれば対処の仕方もあるかも知れませぬが、自然に治まるのを

中川淳庵も悲痛な表情だ。

いえ幸いなことに長崎組はもとより、 屋敷の者たちは感染せずに済んでい

「分からないのは身体の中だけではありませんな。

我ら医者がこうした疫病を抑えられる日はくるのでしょうかな」

杉田玄白が己に問うように呟いた。

信頼のおける当時の記録によれば三月末頃より疫病が流行し始め、 江戸中にて五

この疫病がなんの病気なのかは結局不明で、天然痘との説もあるものの、記録に 月迄におよそ十九万人が疫死したという大惨事となった。

痘瘡との記述もなく、痢病(下痢)を併発することからコレラの可能性もあるが、 コレラが日本へ初めて侵入したのはこの年より五十年後の一八二二年一〇月(文

政五年八月)とされているので違うらしい…。

ただしこの疫病で須田町の岡っ引きだった岩次郎が感染して亡くなっていたこと

をまだ春貞たちは知らなかった。

岩次郎が亡くなったことを知らせてきたのは読売屋の浅太郎だった。かつては読 岩次郎は七十八歳になっていたが、養子の三郎が後を立派に継いでいた。 売屋と十手持ちという追われる方と取り締まる方ということで犬猿の仲だったが

春貞と一 緒 に縁 が出来、 時 には お 互 77 に身体の心配をする間柄になっていただけ

に浅太郎の落胆は大きかった。

話しを聞いた春貞も、

「昔の仲間が次々と三途の川を渡ってしまいやがる。

寂しいじゃあねえか。ええ、浅太郎さん」

と涙ぐむと浅太郎は、

「旦那に仲間と言っていただけたと知ればゲジゲシの岩次郎め、 うれし泣きして

生き返りますぜ」

と流れる涙も拭かずに言った。

疫病は江戸で猛威を振るった後、京・大坂・中国へと広がり、 伊勢参りや巡礼途

中の者も多く死に、九州へも拡がった。

幕府は救済措置として朝鮮(高麗)人参を放出したが効き目は期待できなかった。

安永二年も師走に入った十四日、 平賀源内が久しぶりに春貞の屋敷に顔を見せた

が一人ではなく連れが居た。

良沢はいなかったが、 杉田玄白、 中川淳庵、 桂川甫周などの長崎組が 「解体新

最終稿をあれやこれやと確認 していたときだった。

「源内さん、今度はどこからお戻りでしたか」

玄白が相好を崩して源内の手を取り部屋に導くと源内は連れの男に

「お主も入れ。遠慮はいらぬぞ」

と声をかけ、

「秋田藩士の小田野武助くんだ。

おれは十月まで秋田藩で鉱山の技術指導をやっていたんだが、 武助くんは俺の絵

の弟子ってとこでな」

そう紹介しながら勝手知ったる座敷に座り込んだ。

「小田野武助と申します。 よろしくお引き回しくだされ」

武助と名乗った男は二十三歳、藩主から銅山方産物吟味役を仰せつかりこの度江

戸に上ったというなかなかの男前であった。

「ほう。 我らは蘭方医ですがあなたは絵を描くんですか」 の気安さで声をかけると武

「は 浦周 ° (が 源内先生から蘭画をお教えいただいております」 同 年配 助 **は**

蘭画とはいわゆる洋画のことだ。

「そうそう、玄白さん。版元で『解体約図』を見たけどありゃあ良い策だなあ。

真打ちの出版を前に世の反応を見る上でもな。

事実なかなかの評判と聞いたぜ」

源内は一同の顔を眺めながら言い切った。

「口の悪い源内さんから褒められるとは嬉しいですな」

玄白が破顔すると源内は、

「俺は悪口を言うつもりはねえが、 世辞を言わないだけよ。

ああ、そうそう『解体約図』は良いとしてだな、絵がいまいちだな…」

と遠慮の無い物言いをした。

しかし玄白たちは嫌な顔をするかと思いきや、

「そうなんですよ源内さん。日本画の絵師ではターヘル・アナトミアに匹敵する

腑分図は難しいのです。

どなたか上手な方はおりませんかな」

玄白は絵 の粗雑な点は気にしていたらしく素直に答えた。

にっこりと笑った源内は、

と願った。

「だからよ。ここにいるだろうに。

蘭画の大家がよ…」

と武助を顎で示した。

当の武助は面食らって腰が引けているが源内はかまわず、

るんだ。それにな、いつまでも江戸にいる分けでもねえ。 「繰り返すが武助くんは俺の弟子で、俺が太鼓判を押す蘭画が描けるって言って

江戸勤番のうちに頼んだ方がいいぜ」

と機嫌良く言った。

杉田玄白がターヘル・アナトミアの解剖図のページを開くと同時に紙と筆を差し

出し、

「小田野さん。ひとつここの図を写してみてはくださらんか」

- 139 / 195 -

安永三年(一七七四年) が明け、 春貞 な齢 七十七歳 になった。

養女の夏穂にいわせると歳を取る毎に実母 の弥生に似てくるという。

些か白髪が薄くなり髷が細くなったが、

として出入りの商 人達からは六十位にしか見えないと言わ れていた。

は大小二本差すと腰が重くていけねえ」 「まあ、世辞半分と聞いておくが、若い時との違いは本人しか分かるめい。

最近

と本人の弁だ。

「さようですな。 しかしそれがしから見ても春さんはやはり若

八歳年下の俺より若く見えるんですから嫌になりますな」

米道格左衛門が気持ちの良い朝の日射しを浴びながら朝餉の後 う つ 一 時、 愛刀孫六

春貞の背筋は伸びていたし歩き方も矍鑠

兼元の一振りを手入れしながら呟い

するとお文が膳を片付けながら、

「だけども米道さま。旦那もお若いですよ。

やはり日々やっとうで心身共に鍛錬なさっているからでしょうか ね

と声をかけると格左衛門も満更ではないようで頷きながら茶に手を伸ばし、

「しかし、お文さん。お前さんもお歳には見えんぞ。

そしてな、いつも元気で明るく立ち振る舞ってくれる。 ありがたいことじゃ」

と言い返した。

ださったのでこうして命が繋がったんです。 に係わるというので笙船先生の願いとは言え旦那がスパッと足を切り落としてく 「旦那。お世辞でも嬉しいけどさ、そもそもあたしの足が腐ってそのままでは命

旦那は笙船先生と夫婦医者先生と共にあたしの命の恩人ですから長生きしてくれ

お文は笑顔を振りまきながら台所に向かった。

「なあ、春さん。しかし笙船先生も無茶を言うものよ。この俺に患者の足を切り

落とせと言うんだからなあ。

そういえば 俺 も歳を取 った か、 最近. 無性に笙船先生に会い たくなったぜ」

格左衛門が珍しく無精髭に手をやりながら呟いた。

「ふむ。同感だな。

彼岸になったら墓参りにいくことにしようか…」

春貞が庭の残雪を眺めながら言った。

三月十九日、 彼岸 の中日に本所回向院 へ墓参りに行くことになった。

なお二十四節気の計算方式が現在と宣明暦・寛政暦とでは違うため、

秋分の日付は異なる。

の屋敷 の菩提寺は 乳母と共にこの地に引っ越してきてからずっと近隣 0 小かさ

な寺だったが、 妻幸江が亡くなったのを機会にと本所回向院に移した。

回向院は、 振袖火事と呼ばれる明暦三年の大火(一六五七年)の焼死者十万八千

するだけでなく、 のちに安政大地震をはじめ、 人を幕命 (当時 の将 あらゆる宗派だけでなく人のみにあらず、 軍 は徳川家綱)によって葬った万人塚が始 水死者や焼死者・刑死者など横死者 動物すべての生ある ま りであ の無縁仏も 埋葬

のを供養するという理念を持つ浄土宗の寺院だ。

春分および

「俺たちも将来ここに眠ることになるがな、 がって墓 一地を移すとき、 享保二十年に死んだ犬のくろ 賑やかな方がよいではない Ó 肻 ξ 緒 に 移 か

と春貞は笑った。

三郎そして小川笙船 ていた身元不明の老女、そして犬の 幸江 本所 回向 0 四郎とその妻亜耶も葬られ 面 院 .親および幸江、 の松平家の墓 の分骨及び箱根雲助の棟梁だった松谷久四郎 理子、 元には、 てい 弥三郎、 実母 クロも供養されていた。 た。 の弥生と従者友子、 さらに屋敷の門前 田宮助左衛門、 乳 堀 田 母 に行き倒 の髻は勿論 万之助、 0 沙代を れとな 横 は 料

その 格左衛門、井之上新界とおよし、新一郎と吉太郎、奈美そしてお文とお輝が向か 格左衛門も一緒に行きたがったが、 うことに É な 春貞の墓参りの供は らった。 お 蘭 は 屋敷を留守にするわけには もとより夏穂と秋子、 静香 と留き いかず、 吉だ 日を改 つ 8

的近 本所 になった。 回向院 かし これならあっと言う間だ。 へは春貞 春貞 の健康を危惧したお蘭 の屋敷がある向島 (小梅村) の言い分が通り、 から南下すれば本所だから比 大川を舟で下ること

「本所あたりは久しぶりよなあ」

舟から下りた春貞が椿の柄を染め抜いた首巻きを直しながら呟いた。

「さようですな。あっしらがお屋敷に奉公したときにはまだまだ野っ原が多かっ

たですな」

留吉が応じた。

なり、明治四十二年(一九○九年)旧両国国技館が建てられるに至った。したが 年)以降になると、境内で勧進相撲が興行された。これが今日の大相撲の起源と 本所あたりは明暦の大火後に開発され、 は回向院が建ってからは盛り場としても繁盛していた。また明和五年(一七六八 って国技館建設までの時代の相撲を指して「回向院相撲」と呼ぶこともあるほど 町屋・武家地として発展したが、両国

歳の頃なら三十前か、押し出しの良いすらりとした長身の着流しに落とし差 た武士と見るからに流れ者のような年配の男が浪人者三人、そしてこれまた地元 のやくざ者と思われる十人とに囲まれていた。 一行が墓参りを終えて舟まで戻ろうとしていたとき奇妙な喧嘩に遭遇した。

「おい。本所の銕とか呼ばれていきがってると長生きできねえぜ。

いっぱ しの顔 役のつもりかもしれねえが、 上には上がいるということを教えてや

ろうじゃあねえか」

やくざ者の頭か、用心棒が控えていることに力を得たのか一人が大声で怒鳴

7

「ふん。ひとりじゃあなにもできねえ溝鼠めが、 今日はまた随分と威勢がい いじ

弋ニジュルデーやあねえか」

武士が流れ者を後ろ手に庇いながら悠然と言い放った。

「なにおつ・・・。

先生方、痛めつけておくんなさい」

その声と同時に浪人者三人が刀の柄に手を掛けた。

思わず静香と留吉が飛び出そうとしたがどうしたわけか春貞が止めた。

刹那、 の抜き身は宙に 用心棒たちが抜刀し、本所の銕と呼ばれた武士に迫ったと思ったら、一人 舞い、二人は胴と肩を抜か れて崩れ落ちた。

「峰打ちだ。早いとこ手当すれば大事にはならぬ。

去れ…」

本所の銕が刀を鞘に収めながら言った。

٠.

「危ない」

静香が斜め前方に飛びながら右手を振ると、

「ぎゃあああ」

と叫び声と共に向かいの屋根から弓矢をつがえた男が落ちてきた。

「卑怯な…」

静香が叫びながらなおも回りを注視した。

「ちつ。し、しくじったか。

逃げろっ」

やくざたちが一斉に逃げ出した。

それを見た春貞はゆっくりと踵を返したとき、

「あいや、待たれよ。

危ないところをお助けいただきました。

この通りでござる。

ぶしつけながらお名前をお聞かせくだされ」

やくざ者に本所の銕と呼ばれた武士が磊落に近づき春貞と静香に頭を下げた。

「これはご丁寧に痛 み 入ります。

我らは墓参りの帰り。 お節介をいたしましたが、 なに…お手前のご器量であれば

いらぬお節介でした。 お許しあれ…」

春貞は笑顔で軽く頭を下げた。

「申し遅れましたが、 それがしは長谷川平蔵宣以と申す・・・」

と武士が名乗った。 一瞬首を傾げた春貞は

「おお。 もしや貴殿は火付盗賊改長官、宣雄どののご子息か…。

それがしは向島に屋敷を構える松平春貞です」

そう言いながらも思い出した…。

追われた放火犯人を捕らえた際に春貞は長谷川平蔵宣雄と出会い、 あの明和 服の茶でしばし語り合ったことを。 九年(一七七二年)二月二十九日の大火の後の四月三日、 客間 屋敷 に誘って の竹林で

「はい。父をご存じでございましたか」

の笑顔で嬉しそうに応じた平蔵に その まま去りがたかった春貞は

「よろしかったら向こうの蕎麦屋にでもいかがかな」

と誘った。

まだ日が高かったが店には他の客も居ず、春貞と平蔵は狭い小上がりに座し、夏 、お蘭、 静香、秋子、そして留吉は粗末な椅子に座った。 しかし平蔵と一緒に

居た年寄りはいつの間にか姿を消していた。

「おやじ、まずは酒をな、 数本と人数分の蕎麦を頼む」

この辺りの店には詳しいのか平蔵が願うと水気のない顔をした爺の顔がほころん

「まずは一献…」

平蔵は春貞の杯に酌をすると己の盃には手酌して盃を持ち上げた。

盃をぐいっと空けた春貞は、

「親爺殿はご健勝か。確か、京の奉行所へご栄転とまでは存じおりますがな」

と問うた。

「いや、京で亡くなりましてございます」

「なんと…。 いつのことでございましたか」

玄銭は高さ押)ないこ。「京の西町奉行に転任した翌年六月でござった」

平蔵は盃を呷り呟いた。

知らない事とは いえぶしつけな問いをいたしましたな。

激務であったのでしょうが残念でございました」

春貞は盃を置いて言った。

「で、失礼ながらいまはなにを…。

いや年寄りの好奇心ですがな」

春貞が続けると、

を良いことに堅苦しい武家との付き合いを避け、無頼漢たちとの縁が多々できま 「いやはや先ほどの騒ぎをご覧いただきましたとおり、これまで非役であること

してな。いまだにあのような揉め事に巻き込まれております。

私事ながら来月には西の丸御書院番士を仰せつかる内示を受けておりますので素 行に気を付けねばなりませぬのに地は隠せませぬな」

と平蔵は笑った。

そして、

「いや、そういえばそれがしも親爺と一緒に京に行きましたが、 いま思

した…。

江戸向島に松平春貞という凄腕の御仁がおると、 確か親爺から酒の席で聞かされ

たことがありました。

江戸大火の後でお屋敷の一角にて放火犯を捕らえたときにお世話になったとか」

と懐かしそうに話した。

「ただただ我が敷地内に逃げ込んだ賊を捕らえたに過ぎませんがな」

春貞は答えながらもふと・・・

「思い出したといえば、それがしも思い出したことがありますぞ。

そのとき親爺どの…長谷川宣雄どのが 『銕三郎という息子がおりまするが、 事情

がありひねくれ者で困っております』…いや失礼。親爺どののお話しですがな、

そう申されておりましたが失礼ながらお手前のことでございましたか」

と笑顔で問うた。

「お恥ずかしいことです。よい歳をして愚痴になりますが、継母とどうにも合い

ませんでな。一時は家を飛び出し無頼の徒と悪さをして過ごしておりました。

さぞや親爺も気苦労が絶えなかったと思いますが、いや…いまだにその根性が抜

けておりません」

平蔵は盃を呷って苦笑いした。

「ところで先ほどの腕前を拝見しましたが、 お手前は一刀流でしたか」

春貞が問うと、

「さよう。しかしよくお分かりでございますな」

平蔵の目が一瞬光った。

「いや、三年前に亡くなった八丁堀の親友が一 刀流の遣い手でしてな。 お姿を拝

見していてふと奴の姿と重なったのでござる。

しかし、御書院番士となれば上様御外出時の警固と御先手徒士。となればやはり

かなりの腕前でございますな」

春貞が笑顔を向けると、

「いやはや、お恥ずかしゅうござる。

まだまだ若造です。

それに先ほどお会いしたばかりではございますが、春貞さまは我らが束になって

も叶う腕前ではございませぬな」

平蔵がため息まじりに言い切った。

すでにそれぞれの蕎麦が空になっていた。

春貞は、

「我らの屋敷の一角に剣術道場がござる。

よろしかったらお出かけくだされ。歓迎いたしますでな」

と腰を上げた。

長谷川平蔵宣以はこのとき二十九歳。 ちょうど十年後の天明四年(一 七八四年)

西の丸書院番御徒頭となり、 さらに二年後の天明六年七月には番方の最高位先手弓頭に就き、 世禄四百石に足高六百石が加えられた。 翌年九月十九

日、火付盗賊改めの加役を命じられた。

鬼平の誕生であるがそれはまだまだ先のことだ。

生僧 0 雨 が続く五月、 相変わらず春貞の屋敷に長崎組が集まっていた。 しかし前

野良沢の姿はなかった。

しかし今日は珍しく平賀源内が一緒だった。

「ほう、やっと出版にごぎつけたか。てえしたもんだあんた方は

灰を落とした煙管を右手の指で器用にくるくると回しながら源内は版元に出す最

終稿に目を落とした。

「ほう。やはり前野さんの名は入れられなかったかい」

源内も大体の事情を知らされていただけに残念な顔をした。

中川淳庵がため息まじりに呟くと、 「そうなんですよ。こればかりはご本人が頑ななので仕方ありません」

「まあいいじゃあねえか。

序はあの吉雄耕牛先生というのも気張ってるが、 先生が前野さんの名を出してく

ださってるからな」

ろう。じつに天下後世にとっての徳である」と書いている。 る吉雄耕牛の筆だが、そこで前野良沢の名を上げているだけでなく 「解体新書」の序は源内の言うとおり、阿蘭陀通詞で良沢と玄白の蘭学の師であ (良沢と玄白) がこの仕事でてがらを立てたことはなんといっても最高なことだ 「ああ、 二君

(

「ところで版元は決まってるのかい」

源内の問いに玄白は、

「これから交渉ですが、 このような初めての書を喜んで出版してくれるところな

どありましょうかな」

と不安そうに聞いた。

「それなら須原屋がよいだろうよ。

俺から市兵衛さんに頼んでおこうかい…。

源内はにやりと笑いながら呟いた。

俺の書いたものも二冊須原屋から出しているが、

随分と儲けさせてあげたぜ」

「それは助かります。是非是非」。の内はにそりと笑いなから呟いた

玄白と淳庵が頭を下げた。

平賀源内・森島中良や後に杉田玄白等蘭学者の版元として、 須原屋市兵衛は江戸出版業界の最大手須原屋茂兵衛の暖簾分け店の一つであり、 当時革新的な書物を

そのとき、多く手がけた個性派として知られるようになった。

「先生方、お茶をお持ちしました」

お輝が盆を持ってきた。

「これはこれは、いつもありがとうございます」

玄白が盆を受け取りながら礼を言うとお輝の後ろから春貞が姿を見せた。

「お邪魔してよろしいか…」

笑顔の春貞に玄白は、

「無論のことでございます。

どうぞこちらへ」

と春貞を上座に誘った。

「いかがかな。出版のご準備は」

春貞が座しながら問うた。

「はい。いま源内さんに版元を紹介いただくことになりましたので残りの危惧は

ただひとつ…」

玄白が呟くと、

「お上の顔色でございますか」

と井之上新一郎が聞いた。

ありませんでしたし、例の後藤梨春というお方が出版された『紅毛談』は中に阿 「そうです。なにしろ阿蘭陀の言葉を一冊まとめて漢文とした書などこれまでに

蘭陀語が記述されているからと、 お咎めがあり絶版となりましたから、その点が

些か心配なのです」

玄白が憂い顔を作った。

すると源内が、

「それは杞憂というものです、玄白さん。

過日田沼さまにお目にかかったとき、田沼さまはあなた方の労作をご存じでした

畏れ多くも上様もご承知だとおっしゃってました。

お聞きしたところではどうやら上様がこちらのお屋敷にいらした際に春貞さまか

らお話しがあった由。

お咎めはありますまい」

春貞に軽く会釈しながらそう言い切った。

そして、

「とはいえ念のためだが玄白さん。『解体新書』 が刷 り上がったらまずは幕府

ヘ;具体的には田沼さまを通して将軍家へ献上されるとよいですな」

と続け、さらに春貞に身体を向けた源内は

春貞さま。 聞けば貴方様は先の帝に直接拝謁なされたと漏れ伺いました。

それがしから申すのも僭越ですが 『解体新書』 を京都の公家にも献上できませぬ

カ

と問うた。

「なるほど。源内どのは噂以上の策士ですな」

春貞は機嫌良く破顔し、

「当時拝謁した関白のご子息とは年に一二度、文を交わさせていただいておりま

すのでお頼みしてみましょうかな。

がいてもどうにもできませぬな」 源内どのの申される通り、将軍家と宮家にお受け取りいただけたならもし反対派

頷きながら応じると杉田玄白や中川淳庵はもとより、平賀源内もあらためて春貞 に頭を下げた。

その年すなわち安永三年(一七七四年)八月、 て室町二丁目の東武書林須原屋市兵衛の店から出版された。 ついに 「解体新書」 が全五巻とし

序 図 構成の概略は次の通りであった。

吉雄耕牛の序文の他、図版がまとめられている

・巻之一

総論、 形態・名称、 からだの要素、 骨 格 ・関節総論及び各論

· 巻之二

頭、口、脳・神経、眼、耳、鼻、舌

・巻之四

胸·隔膜、

肺、

心臓、

動脈、

静脈、

門脈、

腹、

腸

胃、

腸間膜

乳糜管、

膵臓

脾臓、 肝臓 胆囊、 腎臓 ・膀胱、 生殖器、 妊娠、 筋肉



世 ようになるきっ の反応 は玄白らが思 かけともなっ ってい た。 た以 一であ り、 ζ **)** わ W) る我が国 で蘭学が注目さ れ

特に杉田玄白の名は全国に知られるようになり、 弟子入りの申し出も多く生活が

また「解体 変する。 **|新書**| の出版は医学界だけへの影響ではなくその後のオランダ語への

鎖国下の日本において西洋の文物を理解する下地ができていったと

いえよう。

はじめて作られ、

理解が進み、

なお 「解体新書」 翻訳 の際に 「神経」 「軟骨」 「動脈」 「十二指腸」 などの語が

それは今日でも使われている。

だが、 ただし杉田玄白が自覚していたとおり、 誤訳も多かったため、 のちに大槻玄沢が訳し直し、 初め ての翻訳とい う性質上仕 「重訂解体新書」 方 ない

政九年(一八二六年)に刊行している。

また るだけでなく「ターヘル・アナトミア」の他、 般 ル解体書」 的だが、 「解体新書」は 玄白らは我 「カスパル解体書」などなど他の原著からをも幾多参考にし再構成 「ターヘル・アナトミア」 が国の医者が理解しやすいようにと和漢 の単 「トンミュス解体書」「ブランカ -純な翻 訳書 であるとの認 の説も引い てい 識

と書き、そして末尾に「東羽秋田藩

小田野直武」と印している。

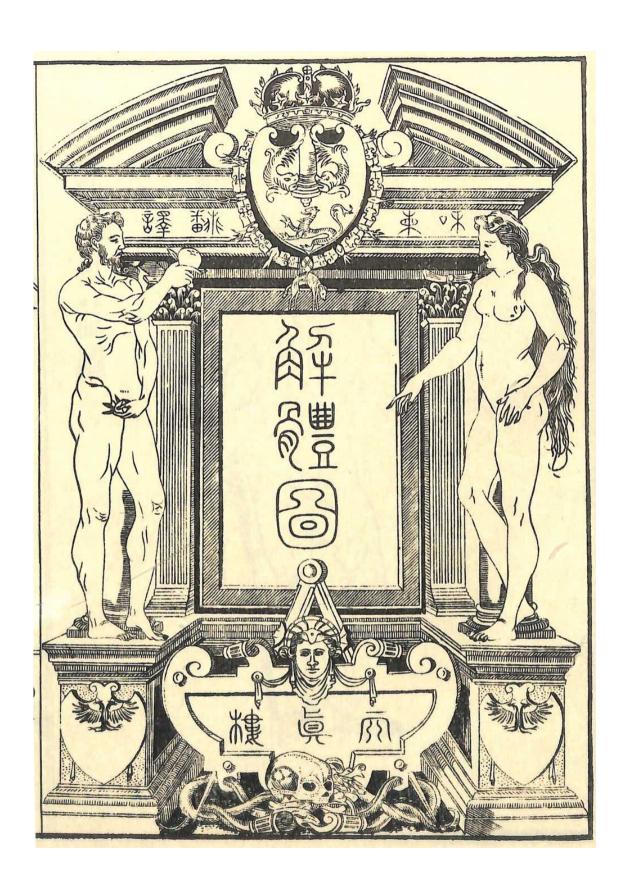
されていることは注目に値する。

さらに、各所に「翼按ずるに」との注釈がつけられている(「翼」 の本名)。要は玄白が再構成した著書といえよう。 とは杉田玄白

なお、解剖 よるものだが、 図は 平賀源内が紹介してくれた秋田藩角館の藩士、 「解体新書」序図の最後に、 小田野武助

また図くべからずと云わば、怨み盟友に及ばん。ああ、 「我が友人杉田玄白訳する所の解体新書成る。予をしてこれが図を写さしむ。そ 寧ろ臭を千載に流さんや。四方の君子、幸いにこれを恕せよ」 毛の画や至れるかな。 余の如き不佞は、敢え企て及ぶ所に 怨みを同袍に買わんより 非ず。 然りと雖も

う。世の君子、このことを許してくれれば幸いである) るであろう。 るものでない。そうはいっても画くことができないといえば、友人が大いに困 分にこの本の図を写してくれという。それはまさに紅毛の画[洋画]で見事なも のだ。自分のように才能がない者があえて背伸びしてやってもとても追いつけ 、私の友人、杉田玄白がやくしてたところの ああ、友人を困らせるよりは、むしろ恥を永遠に流すことにしよ 「解体新書」が出来上がった。 自



招聘された平賀源内と出会い の力に負うところが大きいと言われている。 主君佐竹侯 小 田 野武助 いも崩れ (本名直武) 画をよくし、 ははじめ浮世絵風 秋田 蘭 画 . 蘭 洋 画 と呼ば 画 の技法を学び、 の絵を描 れ る一派が生まれたが、 いてい たが、 その先駆者となっ 銅山 |増産 これは武助 0 た。 ため

Ξ

春貞 新 屋敷は久 月十日、 真夏の日射しが和らぎ、 太郎 郎が の屋敷からは春貞は勿論 の顔もあった。 しぶ 出 春貞 席 りに大勢の人が集まり、 の屋敷で「解体新書」出版記 したが、 長崎から帰り、 「解体新書」 向島診療所に関わる井之上新界とおよし、一 出版 新 大広間が狭く感じられたほどだった。 郎と共に診療所を手伝うことになった 念の祝いを行うことになった。 の慌ただしさと騒ぎが些か静まった九 子の

今日の主賓は

また女衆たち、すなわち静香、 秋子、 奈美、 お文、 お輝そしてお蘭は総出 で膳

手配などで大忙しだった。

「なんの集まりなのかよくわからんけど、 賑やかなのはうれしいよねえ」

お文がこれまた準備 に忙しい留吉に言った。

「お文さん、昔は承知のように多々祝い事やらがあって、こうした集まりがあっ

たものだが、これだけのお人が集まるのは本当に久しぶりだ。

忙しいけどいいもんですな」

と笑顔を向けつつ、

「お文さん、酒樽は届いているかな」

「はい。先ほど道之助さまが確認されておりました」

そんな会話が飛び交う中、 大広間ではひときわ大きな笑い声が響 「いた。

「解体新書」に名が記されている杉田玄白、

中川淳庵、

桂川甫日

周

そして石川玄常だったがやは り一番の注目は玄白だった。

また蘭学 仲 蕳 0 医師たちも数十人呼ばれて嬉々として集まっていたがあの前 野良

沢の姿は無 かった。

確か源内さんもいらしたと思いましたが、 姿が見えませぬな」

桂川甫周が周りを見回すと、

「手水ではございませぬか」

と石川玄常が言った。

しかしその平賀源内は春貞への挨拶のため、 居間にいた。

「ほう。田沼さまからのご伝言とな」

春貞が話しを向けると、

「はい。本来ならご自身でこちらに出向きたいとのことでしたがご承知のように

老中はご多忙とのことでそれがしが走り使いをさせていただきました」

と源内が破顔し、

「まあそれがしに伝言をということですから秘密裏、ご政務のことではございま

せぬ。

先の大火のおりにお見舞いをいただきましたがお屋敷の立て替えができましたの で一度ご足労願いたいとの仰せでございました」

と続けた。

「それはそれは…。

確かに承りました。

話 しは違 いますが、 源内どのは いまなにをなさっておりますのか」

春貞は湯飲みに手を伸ばしながら聞いた。

せんが、昨年から田沼様の願いをお受けし、秩父中津川鉄 のでその反応を見たくてこうして短期間ですが江戸に舞い戻りましてございま かっておりました。また自作の戯曲が先月このお江戸の結城屋で興行されました 「さて。それがしは貧乏性というか気が多いというか、なかなか思いが定まりま Ш の普請工事にとりか

普段は人を人とも思わない平賀源内も春貞の前に出るとどういうわけか話し方が 丁寧になるので自分でも苦笑していた。

「なるほど。それはお忙しいわけだ。

申す南蛮渡りの器械を動くようにするのに苦心されているとのこと。 向こうにおいでの桂川甫周どのにお聞きしましたが、源内どのはエレキテルとか

できましたら是非この爺にもお見せくだされ」

春貞は磊落に願いながら懐から包金二つを取り出して源内の前に置いた。 なんでございますか…」

源内が怪訝な表情をした。

「いや、これまた桂川どのから耳にしたところによれば、 あなたはこれだけお働

きになっているのに失礼ながらいつも金欠とか。

それは金に執着することなく仕事を受けてしまうからだと桂川どのが心配なさっ ておりましたのでな、これはこの年寄りからの小遣いだと思って収めてくださ

そのエレキテルなるものを直すのも良いが、どこからも金は出てこんでしょう」 春貞が笑うと源内は珍しく両手を突いて頭を下げた。

さっている春貞さまからなら安心して遠慮無くいただけます。 つに乗ってしまうと今度はなかなか好きなことができませぬが、 「ははつ。とかく世の中、 金で人を動かそうとする者が多すぎます。それにうか 田沼様が心服な

実はここのところかなり困っておりましたので本当に助かります」

頭を掻きながら源内は嬉しそうに五十両を懐に収め、皆のいる大広間に足を向け

すると襖が開かれ、久しぶりに佐吉が座していた。

春貞が背を向けたまま声をかけた。 「佐吉か、ご苦労。上様たちに異変があったわけではあるまいな」

にお任せし、将棋ばかりに熱中しているとの讒言もございますがな」 「はい。何ごともございませぬが、上様は最近御政務を松平武元様と田沼意次様

佐吉が言うと、

「ほう。まあそれができるのも世が泰平だからよなあ。

ち直しているようだし、向こうにいる連中のように蘭学に対する批判やお咎めも ともあれ田沼さまの政策を重商主義と批判する向きもあるが、おかげで景気も持

和らいだ世になった。

よいことよ」

春貞が穏やかに言うと佐吉が、

「そうそう、春貞さま。杉田玄白どのが早くご同席なされてくださいとお待ちで

ございますぞ」

と伝えた。

「そうか。待たせてしまったか…」

春貞が腰を上げた。

宴は始まったばかりであった。

杉田玄白と中川淳庵は刷 の屋敷 で行 わ れた 「解体新書」出版記念の集まりが盛大に終 り上がったばかりの「解体新書」を前野良沢に届けるべ わった三日後、

見尺は意下に の幾乗長 ニュース・ロース してく 屋敷へ足を向けた。

良沢は意外にも機嫌良く二人を迎え入れてくれた。

良沢の前に座した玄白と淳庵は無言で風呂敷包みを開き「解体新書」

出しながら深々と頭を下げた。

「玄白どの。おつむをお上げくだされ」

玄白の涙だった。良沢が言葉を掛けると畳にポトリと音がした。

すでに玄白の肩は揺れ嗚咽していたがやっとのことで声を絞り出し、

くお手前に光が当たるべきを、ご承知のような仕儀に相成りました。 本来なら、本当なら…良沢どの、お手前が一番の功労者。幸いお上のお咎めも無 「り…良沢どの。 お陰を持ちまして『解体新書』が出版できましてございます。

五巻を差し

しいただき、これをお収めくだされ」

顔を上げ良沢と視線を交わした杉田玄白は感極まり声を上げて泣き始めた。

隣の中川淳庵も涙ながら、頷きながら玄白の肩に手を回した。

前野良沢は一膝進み、玄白の両手を取った。

「嗚呼…立派に出来上がりましたな。ありがたく頂戴いたす。

れは我ら三人が…一番最初にこうして手を取り合って読み合わせを初めた我ら三 玄白どの。名がどうのこうの、誰が功労者であるか、巷で騒がしいようですがそ

人が承知しているではありませぬか。

名を出すことを拒んだのも、先の晴れがましい席を欠席したのもそれがしの我が

儘。

玄白どの、 あなたが後ろめたい気持ちになることなど微塵もござらん。

それに、確かに読み分けはそれがしも力を尽くしましたが、こうしてまとめ上げ

たのは玄白どの、 お手前 の手腕でございます。

そして直接間接、 幾多の方々に物心共のご支援をいただきましたからこその出

版

:。

ともあれ、この三人がすべてを知っている。それでよろしいではございませぬ

良沢の両眼も真っ赤だった。

良沢が握った玄白の両手の上に中川淳庵が両手を重ね、三人がそのまま振り合っ

「骨が原で読み分けを決心したときも三人でこうしましたな」

淳庵が鼻を啜りながら呟いた。

秋の気配が漂う十月初旬、ふらりと長谷川平蔵が角樽を下げてやってきた。

「これはこれは、一別以来でございますな」

と春貞は早速客間に迎え入れた。

味気ないとこうしてご迷惑を顧みず伺った次第」

「お陰様にてこの度西の丸御書院番士に任ぜられましたが、一人で酒を飲むのも

西の丸御書院番士とは将軍世子の警護役である。

「それはそれはお目出度うござる」

そのとき春江館から鋭い気合いが聞こえた。

座りかけた平蔵は再び腰を上げ、

「春貞どの。 ぶしつけながら道場とやらを見せてはいただけまい かし

と願った。

早速春江館の前に立った平蔵は扁額を見上げて一瞬立ち止まり、意を決したよう

に道場に入った。

ちょうど米道格左衛門と夏穂が二十人ばかりの門弟に稽古をつけていたときだっ

たが平蔵とその後ろに春貞の姿を認め、

「止めっ」

と格左衛門が声をかけた。

春貞の勧めで一礼した平蔵は道場に上がり再び神棚に向かって頭を下げた。

「長谷川平蔵どのだ。

こちらが我が友の米道格左衛門、そしてこちらが米道夏穂と申す」

春貞が紹介し合うとそれぞれが「よろしく」と頭を下げ合った。

一十人の門弟たちは気を利かせてそれぞれ板壁側に座していたが、

「どうだ、誰かお相手してみぬか」

と春貞の声に四人の門弟が立ち上がった。

「長谷川どのは一刀流とお聞きしておるがお主たちでは歯が立たぬであろう。

しかし何ごとも経験よ」

春貞は機嫌良く言いつつ平蔵に向かい、

「一度にお相手してくださらぬか」

と破顔した。

一瞬驚いた表情をした平蔵だったが意を決したか、

と夏穂が手にした袋竹刀二本のうち一本を選んで道場中央に立ち竹刀を青眼 「はつ。 喜んで」

思わず格左衛門と夏穂は目を合わせ、 長谷川平蔵がただならぬ力量の持ち主であ

ることを感じ取っていた。

えるとその姿は一段と大きく見えた。

平蔵の前に立った四人は春江館へ通うようになって二年近くが過ぎていたが下級 武士とはいえそれぞれが野心を持ち藩命で腕を磨いていた者たちだった。

が館長 れぞれが渾身の気合いを持って打ち込んだ。 一礼して平蔵 7の格 左 一衛門だけでなく屋敷 の前 に立った四人は の主人春貞が見所で座していることもあり、 真剣を突き付けられているように恐怖を感

「えいっ」という掛け声と「バシッバシッ」という竹刀が打ち合う音が数回聞こ

に構

えたと思ったら四人のうち二人が大の字で気絶し後の二人は竹刀を飛ばされ、 転

がされていた。

「お見事でござる。長谷川どの」

格左衛門が手を叩きながら声を上げ、 竹刀を持ったまま平蔵 の前に立ち、

「折角のよき機会、一手お手合わせいただけませぬか」

と願うと平蔵は「ふうつ」と息を吐き、

「是非お願いいたす」

頭を下げ、先ほどと同じく青眼に構えた。

格左衛門は二間半ほど間合いをとりつつ、袋竹刀を左足先あたりに向けて立つと

平蔵の竹刀が青眼から上段に移ったと思った刹那、 板壁に座 している門人たちから「ごくり」と生唾を飲み込む音が聞 門弟たちの皆が「あっ」 こえた。 と声

を上げたが一番驚き恐怖さえ感じたのは平蔵自身であった。

何故なら格左衛門がどう動いたのか察知できないまま、気がつくとその切っ先が

の喉元一寸に止まってい たからだ。

かろうじて腰砕けは免れたが右手を前に突き出しながら平蔵は まいりました」

- 174 / 195 -

と素直に頭を下げ、

「これほどの剣客がこの江戸におろうとは…。

それがしは井の中の蛙でございました。しかし手筋がまったく読めないばかりか

動きが見えないなどということは初めてです」

大きく深呼吸した平蔵が言い切った。

「いや、久しぶりに脇の下に汗をかく御仁と立ち会えました。

失礼ながら西の丸御書院番士にしておくのは勿体ない…。是非当館 の師範として

お仲間になってほしいものですな」

格左衛門が冗談まじりに平蔵の肩を軽く叩きながら破顔するとやっと道場の空気

が和らいだ。

五.

汗を拭き、 顔を洗った平蔵と格左衛門そして春貞が客間に座すと静香が待ってい

たかのように冷茶を運んで来た。

十月とはいえ今年の夏は長く、身体を動かした後には冷たいものが心地よい。

早速口にした平蔵は、

「これは美味い」

と声を上げた。

「静香が気を利かせてくれたのであろう。

確か京から玉露が届いたと言っていたからな…」

春貞も喉を鳴らしながら一気に飲み下した。

何ごとかと腰を上げた春貞に静香は小声で、

そのとき静香が早足で再び部屋に入ってきて春貞に視線を送った。

「田沼さまがお越しでございますが…」

と呟いた。

「うむ。ではこちらにお通ししてくれ。

そしてな、静香。些か時刻が早いがこの人数分の膳と酒の用意を頼む」

春貞が願うと静香が美しい笑顔で頷いた。

来客と知った長谷川平蔵は、

「お客様のようですから拙者はお暇いたしましょうぞ」

と腰を上げかけると春貞が、

「いや、長谷川どの。折角ですから是非是非ご同席くだされ。

いただいた酒もございますのでな」

そう言いながら一端客間を出てすぐに田沼意次と共に入ってきた。 驚いたのは平

蔵だ…。

長谷川平蔵は明和五年(一七六八年)十二月五日、二十三歳の時に将軍徳川家治 を覚えていたからだ。 に御目見し、長谷川家の家督相続人となってから数度登城しているので田沼の顔

「これは田沼さま。ははつ…」

と平伏した平蔵に、

「いま春貞どのにお聞きしたが、そちは京都奉行だった長谷川宣雄どのの息子と

なこ

「はっ、宣以でございます」

平伏したまま平蔵が答えると意次は春貞と共に座しながら、

- 177 / 195 -

「宣以とやら。ここは城ではなく、 それがしが師と仰いでいる春貞どののお屋

敷。お手を上げてくだされ」

と磊落に破顔した。

「剣の腕もなかなかと聞いたぞ。

いまどき珍しい男よのう。 押し出しもそして男前でもある。それがしの近くに欲

しい人材じゃ…」

意次にそう言われた平蔵はただ平伏するしかなかったが、 このとき春貞の屋敷で

なぜなら早くも翌年西の丸仮御進物番として田沼意次へ届けられた進物を管理す 田沼意次と同席したことが長谷川平蔵異例の出世のきっかけとなった。

「春貞さま…」

るお役に抜擢されたからだ。

再び静香の声がした。

襖を開けた静香は申し訳なさそうに、

「平賀源内さまが、ご老中がおいでとのことならお会いしたいといつものお仲間

とお待ちでございます」

と伝えると春貞が応じる前に意次が、

「おお、 源内が来たか。 よいよい、 賑やかなのは好きじゃ。皆こちらに連れてき

てくれ」

機嫌よく答えた。

平賀源内と田沼意次は旧知 0 仲だったが、 源内と一緒に連れ立ってやってきたの

は杉田玄白、 、中川淳庵、 桂川甫周そして小田野武助だった。

「よいよい。遠慮せず入れ、入れ…。

いやここはそれがしの屋敷ではなかったな」

意次の磊落な物言いに恐縮しながらも一同が座すと、それを待っていたかのよう

に静香、秋子、奈美が膳を運んで来た。

しかしいきなり老中を前にして武助は緊張し小さくなっている。

「田沼さま。この酒は長谷川どのからのいただきものでございます」

春貞がそう言うと、

「それはありがたい」

- と意次が相好を崩すと源内が、

「こりゃあしまった。

俺たちは手ぶらだったぜ」

と己の額を掌で叩くと一同が笑った。

「田沼さま。まずは一献…」

静香が銚子を意次に向けたのを合図に宴が始まった。

「これは美味い。春貞さま、これは田楽ですな」

源内が舌鼓を打ちながら問うと、春貞に促された秋子が、

「ウニ田楽にございます」

と答えた。

「いやはや、これは酒に合いまするな。どのように調理なさるのか」

平蔵も乗り出すと秋子が簡単な説明をはじめた。

味噌の代わりにウニを用いるが、塩ウニを大根の切れ端をすりこ木がわりに使っ てすり、調味料を加えてさらにする。

別途水気を取った豆腐を横二枚に切り、 く焼き、調味したウニを豆腐表面にたっぷりと塗る。 扇形に切りそろえ竹串に刺して炭火で軽

「そして、再び火にかざし、ウニ味噌に適度な焼き目がつきましたらできあがり

でございます。

そう、調味料としていただきましたお酒も使わせていただきました」

秋子がそう言い終わり頭を下げて退出した。

「ところで源内。いまなにをしておる」

意次が問うた。

「はい。まずは・・」

「まずはなんじゃ」

ルを動くようにしたいと日夜工夫をしております」 かりを執筆中でもございます。しかし何といっても長崎から持ち帰ったエレキテ 「田沼さまご下命の鉱山普請についての考察をしておりますが、浄瑠璃本二作ば

「あのガラクタ、動くようになるのか」

意次は一度源内が持ち込んだものを見ているようだった。

が、まあそれがしのやることですから何とかなるでしょう」 「どうでしょうか。しかし動作の理屈がわかりませんとどうしようもありません

源内は盃を仰いで言った。

「型破りのお前のことだ。上手く行くとよいな

意次はそう言いながら顔を杉田玄白に向け、

『解体新書』わしも覗いてみたが、気持ち悪いな。 飯が不味くなってい

かんし

と言い切ったが顔は笑っていた。

「恐れ入ります。しかし人の身体は皆同じくあのようなことになっております」

玄白が緊張気味に答えた。

その場を和らげようとしたのか源内が、

「玄白さんはこれからも阿蘭陀医書の読み分けを続けなさるか」

と問うた。

思っています」 ミア』と格闘いたしましたが、これからは蘭学を後進に伝えるべく努力したいと におられる中川淳庵さん、桂川甫周さんらと足掛け四年の間『ターヘル・アナト 「いや。わたしは医学の正確性と医術の進歩を願って前野良沢どの、そしてここ

玄白が言うと、

「そうかえ。では良沢さんはどうされている」

遠慮の無い源内は続けざまに玄白に問いを向けた。

は医術を通り越して阿蘭陀の言葉の妙に取り込まれています。 「あのお方なくして『解体新書』は生まれなかったですが、すでにあの方の興味

すごいお人です、良沢どのは」

玄白がしみじみと呟いた。

「変わった男だと聞いたことがあるがな…」

今度は意次が問うと源内が、

のう』と声をかけたられた事をよろこび、『蘭化』と号することにしたそうです 「過日聞いたところだと良沢さんは藩主奥平昌鹿さまからお前は阿蘭陀の化物よ

な。間違いなく変わったお人だな」

と言うと、

「江戸一変わった男のお前に言われるようじゃ、その良沢とやらも変な奴よの

う

意次が笑った。

「田沼さま。この爺が思うに人から型破り、 変わり者と言われる者こそ新しき世

春貞がそう言いながらウニ田楽の竹串をフッと投げると座敷に入り込んだ蠅が襖

に文字通り串刺しになった。

「ふえぇ。話しには聞いてたけど、凄え凄え」

源内は両手を叩いて喜んだがすぐに真顔となり、

に変わり者扱いだ。なあ…」 れでなかなかていへんなんだがな。 「俺も確かに変わり者、規格外の人間だと自覚してるぜ…。しかし変わり者もこ しかしそういえばこの武助も藩に帰れば大い

と武助の肩に腕を回して呟くと田沼意次は、 「それがしも常に周りから事あるごとに『成り上がり者』 『それは前例がござら

ん』などと言われ、城内一の変わり者、嫌われ者よ」

と苦笑した。

「なるほど。この爺も杓子定規が嫌いで尾張を捨てた変わり者。 取り得があると

すれば剣しかない…。

春貞も盃を持ったまま首を傾げると いまさらどうこうするつもりもないが、これでよかったのだろうかな」

杉田玄白が、

生があっても足りぬと笑われましてございます」 いされましたな。なにしろ長崎の通詞たちからも阿蘭陀語などに関わると何度人 「我らも『ターヘル・アナトミア』の読み合わせをはじめようとした際、 変人扱

と縁側越しの庭を見つめて呟いた。

するといままで黙って聞いていた長谷川平蔵が面を上げ、

「なるほど。いままでそれがしも父はもとより義母から『お前は変わり者。せめ

てお家の名に傷をつけぬようにせよ』と言い続けられましたが、変わり者でもよ

ろしいのですな」

と誰にともなく問うた。

「人生五十年。どの道をいくかは人それぞれなれど、定めというものもあろう。

しかしどの道を進むにせよ人生は短い。

無心に、懸命に突き進むしかあるまい。

なあ、そうではないかご一同」

春貞がそう言い切ったとき、静香が、

「失礼いたします。新しいささをお持ちいたしました」

と声をかけた。

田沼意次がにっこりしながら、

「ではご一同。どうやらここには変わり者ばかりのようじゃ。ここいらでその変

わり者たち同士で祝杯を上げようではないか」

そういうと、

「乾杯!」という声が一同から上がった。そして、「おおっ」

の大合唱となった。「変わり者に幸あれ」

日が落ちたからか、一陣の涼しい風が客間を吹き抜け、 皆の赤い頬を撫でた。

- 186 / 195 -

鎖国 の江 戸中期、 史上初と言ってよい本格的な西洋医学書の和訳に無謀にも挑戦

した男たちがいた。

足掛け四年の歳月の後、その努力は「解体新書」として結実する。

きく変えた…。そして実は我らの松平春貞は彼らの影の庇護者でもあったのだ。 しかしその想像を絶する苦難は翻訳そのものだけに留まらずそれぞれの人生を大

とまあ、本編は本当に楽しみながら書いた。

ただし一言最初にお断りしておきたいことがある。

本作品は完全なる独立作品ではなく、これまで十四編続いた「首巻き春貞~松平

春貞一代記」の流れを組むものだ。

したがって時折といおうか多々過去の話が出てくる。

もし本編からお読みいただいたという方がいらしたらご面倒ながら旧作にもお目

を通していただくことをお勧めしたい

ということで、時代小説「首巻き春貞」は筆者自身考えもしなかった壮大なる物

に うよ な り 嵵 感 代 が あ 0 傍観者に るが 本 徹 編 してみようかと考え は これ ま で 0 ように た 主 末 人 の作品 公春 貞 が で 、ある 縦 横 無

時代 思えば第一作 起こるきっ 所とい 一の医療・医学が中心 う医 かけともなった 「首巻き春貞 療施設を主な舞台とし のテーマである点 「解体 ~小石川 新書」 養 こてス 生所始末」 誕 は変わ ター 生 のドラマを主軸 1 は申 ってい たが、 し上げるまでもなく小 な 本編 4 に L は 我 た が わ 国 け で蘭学が Ш

無論 解 か けと 体新書」を出 歴 史 0 事 艱難辛苦の末にオランダ語 実とし 版 て杉田・ したことは教科書 玄白や前 野 良沢 にも載っている事実だ。 0 「ター が ·骨が ヘル 原 で腑分けを見学し、 ・アナトミア」 を翻 それ 訳 を

例えば、 論 解 辺 体 杉田 か . 新 最大 経 との 玄白 書 緯 誘 0 や . の 貢 翼 屋 「蘭 61 が 献者 敷 あ 学事始」 7 に こであっ 北 は つ た 晚 町 . の 奉 年に玄白自 たは も思えば には 行 所 ずの 幾多 か 5 不思 前 身が 町 のミステリーとい 奉 野 議 良沢 筆をとっ 行 な話 0 使 0 名 では 61 が た が記され 来 な 「蘭学事 うか不 <u>ښ</u> 4 明 <u>`</u> \mathbb{H} 明な 腑 始 いないことは 分け 筃 に が 所 詳 あ Ź あ 61 が、 で

医 師 蘭 学事 であったとは 始 に は そ いえ一介の れ 以 Ĺ 一の詳 蘭 方医 7 事 であった杉田玄白になぜ腑分け見学の は 記 され 7 د يا な 7 が、 そもそも小 浜 誘 藩 奧

あったのか・・・。

ば医者なら誰でも容易に見学できるものだったとは思えない。 や良沢はとうの昔に実行していたに違いない。 そもそも腑分けはそんなに珍しいことではなかったようだが、 奉行所に申し込め もしそうなら玄白

そこで小説では独自の解釈をしてみた…。

面白 る「解体新書」 そうした執筆の過程で資料として幾多の書籍類を手に入れたが一番は国公立所蔵 見ていると筆者自身がその場に参加しているような錯覚があって楽しい。 カセットである。 tafelen Johan Adam Kulmus著 Gerardus Dicten訳(1734年刊)」などのレプリ 史料刊行会編 いもので主人公春貞の目を持って杉田玄白や前野良沢ある 「日本医学の夜明け」(一九七八年六月刊)だった。これらはいわゆ 「蘭学事始」そして「ターヘル・アナトミア Ontleedkundige いは平賀源内らを

び臭くもない 全五巻のレプリカも手に入れた。 さらに一九七三年に「解体新書」 これは保存状態が良かったのか未使用同然でか 発刊二百年記念として限定三〇〇〇部作られた

味わっていただけたらと願ってのことだ。 ということで今回の小説にはいくつかそれらの写真を加えてみることにした。 ァイル容量が大きくなるのは欠点かも知れないが、少しでも理解を深め雰囲気を

東京都多摩市の自宅兼仕事部屋にて

お楽しみいただけたら嬉しい。

松田純

主な参考文献 資料 敬称略

酒井シヅ 「まるわ かり 江 芦 の医学」

菊池ひと美 「江戸衣裳図 鑑

菊池ひと美 「江戸 、の暮らし図鑑」

菊池ひと美「江戸おしゃれ図絵

森田健司 '「江戸 の瓦 版 庶民を熱狂させたメディアの正

江戸人文研究会「イラスト・図説でよくわかる江戸 の用語辞

体

典

江戸人文研究会「絵で見る江戸の人物辞典」

Щ 田順子 「江戸の暮ら しがわ かる本」

野火迅

「使ってみた

武士

0

日本語

稲垣史生 「江戸時代大全」

大森洋平 「考証要集 秘伝 ! N Н K 時 代考証資料

人文社 「切絵図 現代図で歩く 江戸 東京散歩」

柳 生宗 、物往来社 矩 渡辺 「 剣 郎 の達人一一一人 「兵法家伝書 データファイル」 付 ·新陰流兵法目

- 江 戸 庶 民 0 食風景 江 戸 の台所」
- 榎木伊太郎 「再現江戸時代料理」
- 高埜利彦 「日本の歴史(十三)元禄・享保の時代」

氏家幹人

「大江戸死体考―人斬り浅右衛門の時代」

- 三谷一馬 「江戸年中行事図聚」
- 貝原益軒 伊藤友信 (翻訳)「養生訓」
- 杉田玄白 、酒井シズ(現代語訳)「解体新書
- 片 桐 一 男 「杉田玄白 蘭学事始」
- 長尾剛 「話し言葉で読める『蘭学事始』」
- 歴史群 像編集部 · 編 「時代小説用語辞典」

梅原亮

「江戸時代の医師修業

学問・学統・

- 羽生和子「江戸時代、 漢方薬の歴史」
- 川英輔 「実見 江戸 の暮らし」
- 大石慎三郎 「田沼意次の時代」
- 深谷 別冊歴史読本「特別増刊 克己「田沼意次―商業革命と江戸城政治家」 「実録 鬼平犯科帳のすべて」

- 平野威馬雄 「平賀源内の生涯 甦る江戸のレオナルド・ダ・ビンチ」
- 土井康弘 「本草学者 平賀源内」
- 奥村正二「平賀源内を歩く 江戸の科学を訪ねて」
- N H K D V D 「風雲児たち~蘭学革命篇
- みなもと太郎「風雲児たち~蘭学革命篇~」
- 国公立所蔵史料刊行会編「日本医学の夜明け」より「解体新書」 Gerardus Dicten訳(一七三四年刊)」それぞれのレプリカ版 「ターヘル・アナトミア Ontleedkundige tafelen Johan Adam Kulmus著 「蘭学事始」
- 小川鼎三監修/大鳥蘭三郎校註「大鳥蘭三郎・解体新書」解説
- 杉田玄白/緒方富雄校註「蘭学事始」
- 杉本つとむ編「図録 蘭学事始」

片桐一男「知の開拓者

杉田玄白」

- 加藤文三「学問 の花開いて『蘭学事始』 のなぞをさぐる」
- 小室千鶴子「小田野直武 解体新書を描いた男」
- 鷲尾厚「解体新書と小田野直武

【掲載図版】すべて筆者所有のレプリカから掲載

三一頁 「ターヘル・アナトミア/ONTLEED-KUNDIGE TAFELEN」

一五九頁 安永三年(一七七四年)に刊行された「解体新書」。 同右の本文一ページ目

旬言つててつ。 ジョ(一七三四年刊) オランダ語版のタイトルページ

巻、付図一巻の全五巻。漢文で書かれている

本文四

「解体新書」付図巻扉絵。秋田角館藩士小田野直武の手による

- 194 / 195 -

本書の無断複写・配布は著作権法上での例外を除き禁じられています。

首巻き春貞 江戸暦 (一) 蘭学事始異説 (決定版)

 2019年5月1日
 第一刷

 2020年5月12日
 第二刷 (決定版)

まつだ じゅんいち

著者:松田純一

http://www.mactechlab.jp

表紙デザイン: Junichi Matsuda